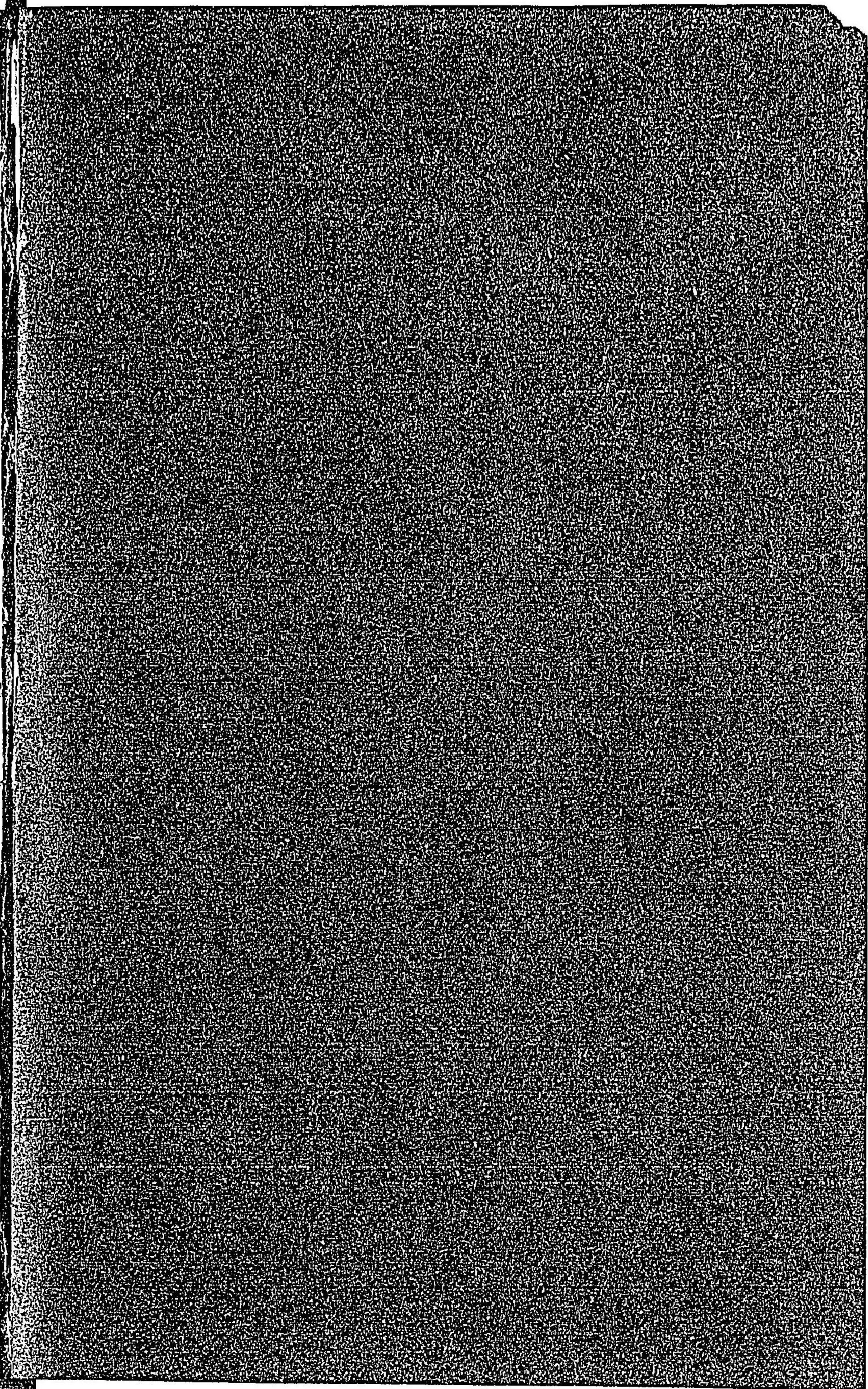
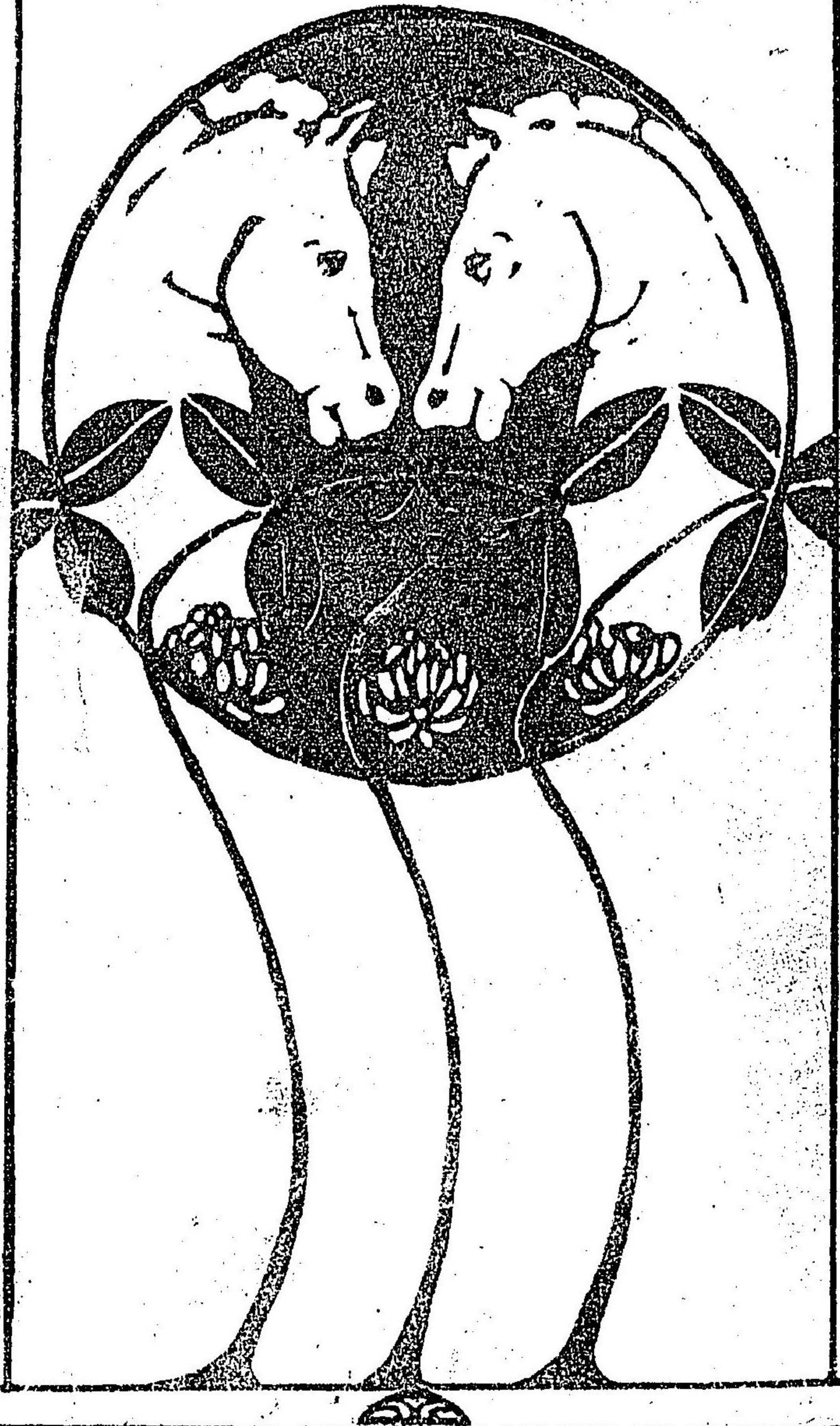
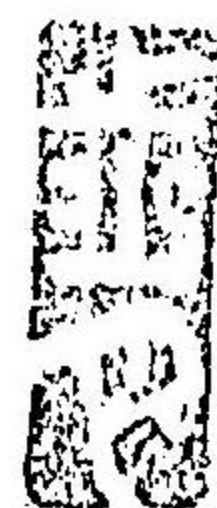


馬匹感

31
334





書

書

字

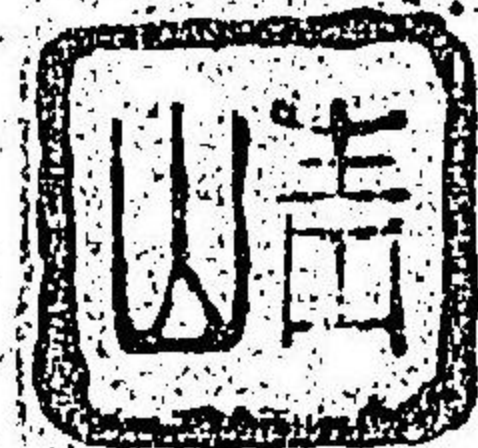


字



著

上

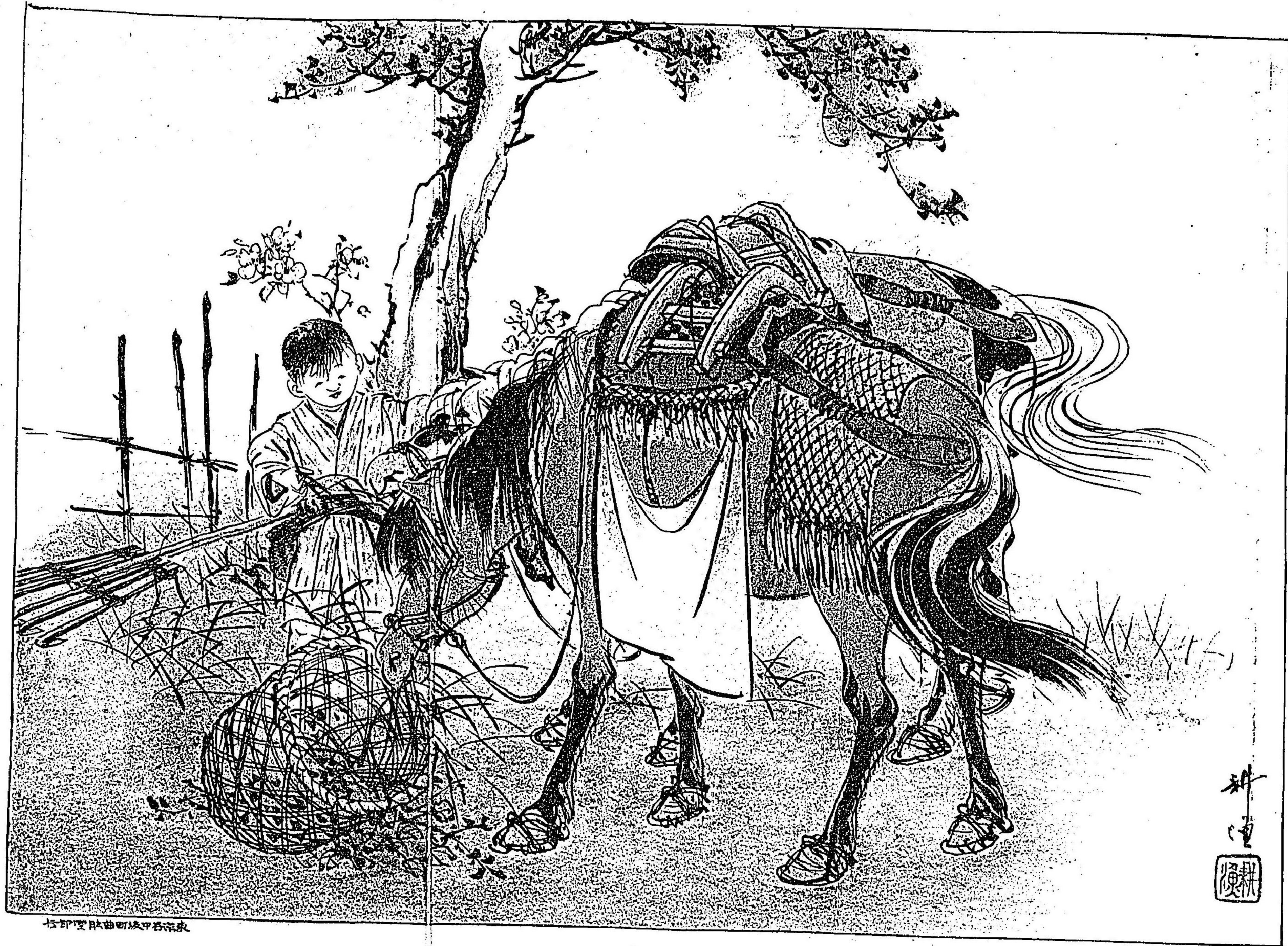


新花

馬立馬



明治
40 5 23
丙午

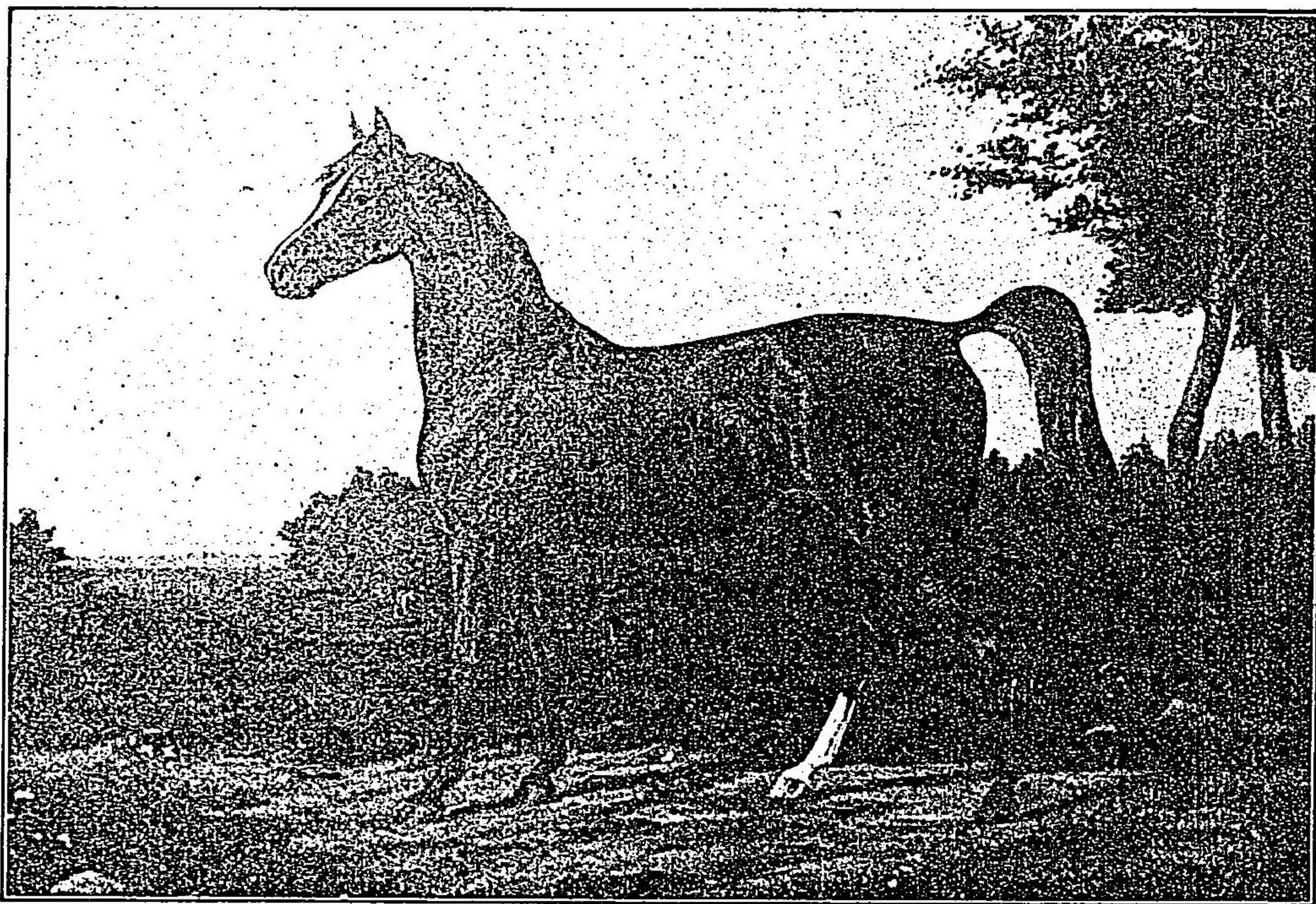


長即實狀曲回坡甲石深成

耕
田
圖



純血あーぶら



近衛
岸輪
練重
吉兵
氏隊
秘藏
筆

はしがき

春の氷は日脚に蹴破られ、風の手に突き流されて、梅が香匂ふささらさの、

ゆかしき時も過ぎ去りて、駒が勇めば花がらるてふ、

彌生の空の恍として、人心浮立つ頃は將に來らんとす、さるを吾ひとり默然として、

この三春の行樂をほかに見つ、都の片ほとり澁谷の里に、

書窓蔭暗き破れ机を友とし、馬匹可愛さに筆を採る、また一興なしとせんや。

春や來ぬ花よ霞の戀衣

人の心の何さわくらん、

羊の年彌生なかば

澁谷の里にて

佐々木露花

しるす

題字 陸軍大將男爵 川村景明閣下

口繪 愛撫 (坂卷耕漁君畫)

全 純血アラブ (根岸練吉君畫)

馬匹感目次

次	目
一	緒論
一	馬の心
	△馬匹の感情附馬嘶辨
	△馬匹の記憶力
	△馬匹の智力
	△馬匹の忠實
一	戦争と馬匹
一	國民と馬匹
一	東京の馬匹
一	馬匹と俚諺

- 一、馬匹と俳諧 四〇
- 一、馬匹と歌謠 四五
- 一、馬匹と和歌 五〇
- 一、日本馬の種別 五五
- 一、馬匹の旋毛 五九
- 一、馬匹の中毒 六六
- △中毒一鞭の原因 六七
- △有毒植物 六八
- △有毒鑛物 七八
- 一、馬體構造上他動物と異りたる點 八〇
- △馬の耳 八〇
- △馬の齒と銜受け 八一

- △馬の四肢と附蟬 八二
- △馬の胃と腸 八三
- △馬の鬣毛と頭骨 八四
- △馬の起き様 八四
- △馬は嘔吐せず 八五
- △馬は口より呼吸せず 八六
- 一、馬匹と宗教 八六
- △馬頭觀世音 八七
- △神馬 八九
- △繪馬 九〇
- △厩祭の事 九一
- △馬場祭の事 九一
- △厩へ呷札の事 九二

一、英雄と馬匹

△直實か愛馬權太栗毛と直家が駿馬白波

△義仲が最後と愛馬

△義貞か最後と水練栗毛

△畠山重忠と愛馬

△平知盛と愛馬井上黒

△左馬介と大鹿毛

一、古の馬政

一、馬に關する古の禮式作法

△正月乗初の禮式

△婚姻の時驅馬

△馬請取の事

九三

九四

九五

九六

九七

九八

九八

一〇〇

一〇六

一〇六

一〇七

一〇七

一〇七

△馬拜領の事

△神佛前乗の事

△御前乗の事

△貴人鞍下の事

△我鞍下の事

△騎者貴人に對する時

△馬の毛色と裝束

△四節裝束の事

△七口鞍の事

△馬を馬屋に入るゝ作法

△馬屋見物の作法

△乗方に吉日の事

△馬方吉日の事

一〇八

一〇九

一〇九

一一〇

一一〇

一一〇

一一一

一一二

一一二

一一三

一一三

一一四

一一四

目次

△厩へ馬を入るゝ吉日の事

一一四

△馬買吉日の事

一一四

一、馬匹年齢鑑定之歌

一一五

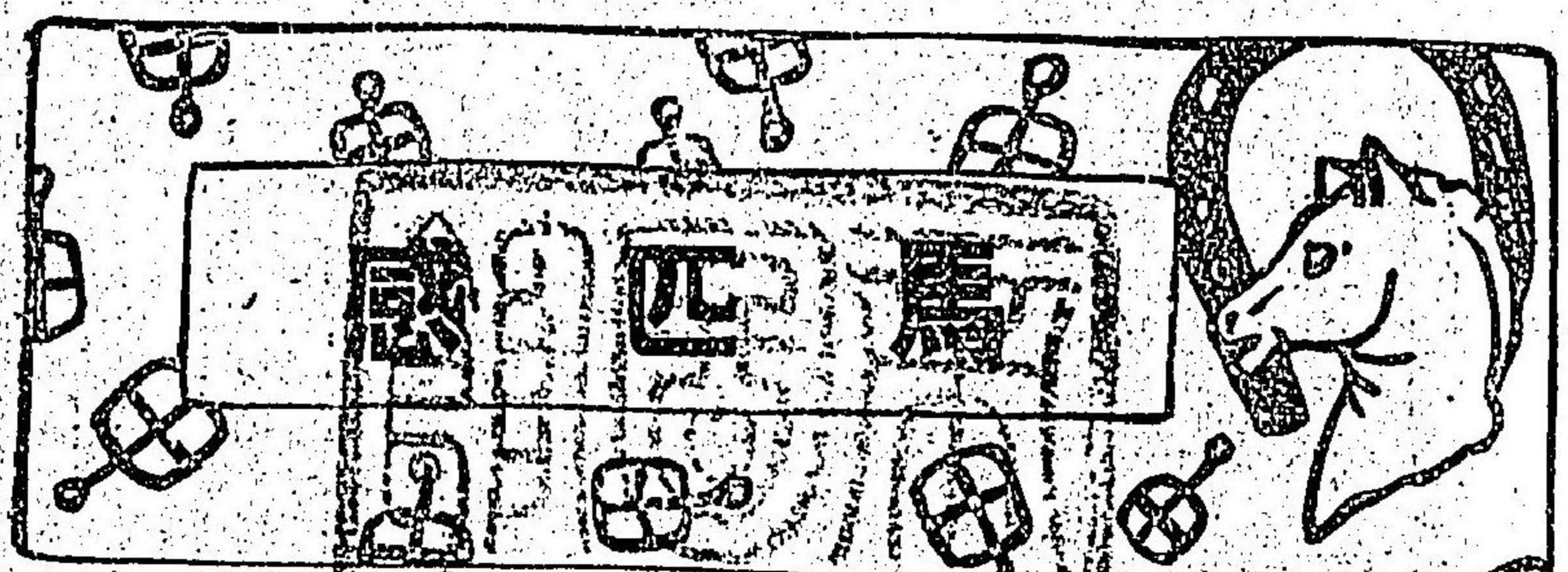
結論

一一七

附録

馬術概要

陸軍中尉 佐々木一雄著



夫れ國家が國權を維持するに於て缺く可らざる戦争は、實に止を得ざることにして、而かもこの止を得ざるの時機が、幾回となし生じ来るを如何せん、然り而して吾人は此時機が、如何なる起因に依つて生じ来るかを問ふの要無し、何となれば吾人は唯々大命により敵軍を挫衄し、敵を壓迫し、以て再び我に向ひ抵抗するの念慮を絶たしめ、國家が政略上の希望を達成せしむるを以て天職とするにあればなり。

然りと雖吾人が敵兵を挫衄し、敵軍を壓迫するが爲に、缺くべからざる要素甚だ多し、曰く國力、曰く兵力、曰く國民の後援、曰く何、曰く何、と實にこれ等幾多の要素が相集りて吾人の天職

△厩へ馬を入るゝ吉日の事

一四

△馬買吉日の事

一四

馬匹年齢鑑定の歌

一五

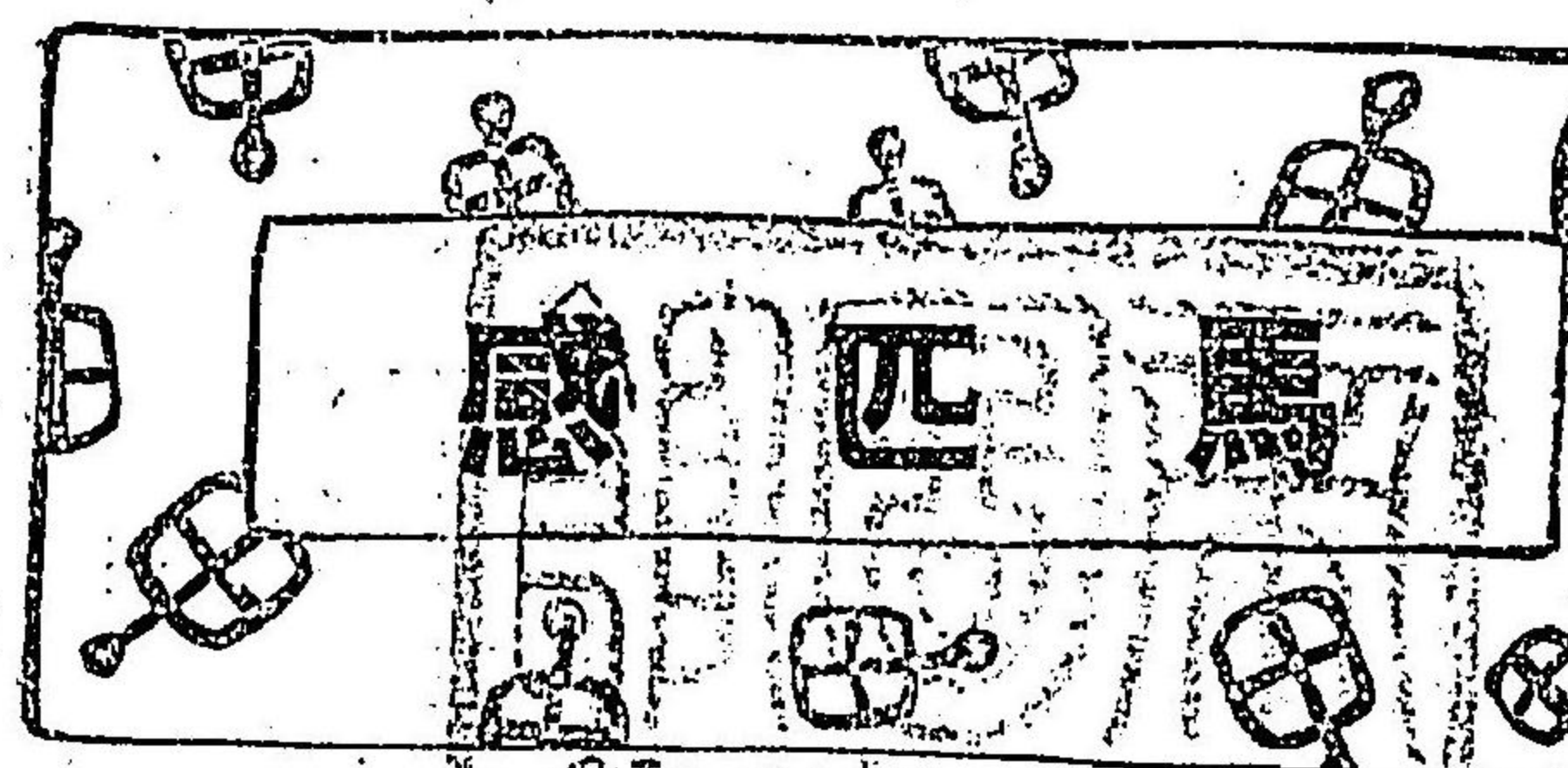
結論

一七

附録

馬術概要

目次



夫れ國家が國權を維持するに於て缺く可らざる戦争は、實に止を得ざることにして、而かもこの止を得ざるの時機が、幾回となき生じ来るを如何せん、然り而して吾人は此時機が、如何なる起因に依つて生じ来るかを問ふの要無し、何となれば吾人は唯々大命により敵軍を挫衄し、敵を壓迫し、以て再び我に向ひ抵抗するの念慮を絶たしめ、國家が政略上の希望を達成せしむるを以て天職とするにあればなり。

然りと雖吾人が敵兵を挫衄し、敵軍を壓迫するが爲に、缺くべからざる要素甚だ多し、曰く國力、曰く兵力、曰く國民の後援、曰く何、曰く何、と實にこれ等幾多の要素が相集りて吾人の天職

を全ふせしむるは、恰も劍を以て戦ふの歩兵、砲の威力を以て敵を壓制するの砲兵のみを以て到底勝を得べきものにあらず、必ずや騎兵を要し、工兵を要し、輜重兵を要とするが如し、而て吾人が天職を全ふする上に於て、尙且一の缺く可からざるもの有り、即ち彼馬匹是なり、しかも予が戦場の目睹は、彼の日露の戦役を以て最初とし、より多くの経験を有せずと雖、實に彼馬匹が至大なる補佐を吾人に與へ、彼の發育の良否、彼の數の多少が、如何に戦争の勝敗を支配したるかを思へば、來るべき次回の戦争が起らざるの以前に於て彼の改良に、彼の發育に努力するは、吾人が目下の最大急務にして又國民が其幾部を擔任するの必要を認む、否國民の共力に依らずむば、到底大なる改善進歩は得て望むべきにあらず、而て現時の國民の多數が馬匹に對する感念は如何、馬匹を取扱ふの熟否は如何、思ふて茲に至れば、吾人は實に長嘆息を漏らすの止むなきに至るなり。

即ち是予がこの書編纂に志したる所以にして、今稿成り名けて「馬匹感」と云ふ、其名稱の適不適を知らず、其内容の精粗を知らず、吾人は唯馬匹の必要を論じて、彼の

性質を世人に紹介し、以て多くの邦人が馬恐ろしと思ふ感念を除去せん事を勉め、女子となく幼兒となく、嬉々として彼馬匹を取扱はん事を望み、かつは予が毎日毎時目睹する東京の或馬匹につき、其悲惨の狀態あるを悲み、又古の馬政を臚列し、以て往古馬政の如何に緻密なりしかを紹介し、英雄と馬匹の關係を略記しては、古武士が馬匹に對する心情を窺ひ、馬匹と俚語、馬匹と和歌、馬匹と俳諧を集めては、世人が如何に彼馬匹に對する感念を發揮せるかを窺ふのたよりとし、さては馬匹の中毒を記して過なからん事を思ひ、馬匹と宗教を添へ、古の旋毛の吉凶を加へ將た古の馬匹に對する禮式作法を附記して、以て昔日の迷信家が、誤説に耳を傾けざらん事を冀はんと欲す。

故に其要は國民と馬匹との間を接近せしめ、世人も馬匹を知り、馬匹も世人を知らん事を願ふて止まざるなり、此の如くにして始めて其改良其發達は得て望むべきなり、馬匹は唯軍隊の専有物として放置するに至りては、實に國民が尙武の心を缺き、國家の重を怠れたると云ふも敢て誣言にあらず可し。

馬の心

凡そ此世に生けるもの、心の作用は其狀千差萬別にして、にはかにこれを窺知し得べきものにあらず、況して彼の言葉も通ひ得ぬ馬の心や、到底一朝一夕に判断し得べきにあらず、されど永年彼の主として、霜深き朝、月清き夕、さては花咲く春の野や、夏の最中の翠色滴る樹陰の泉に水飼ひつ、あるは茅蜩の聲に驚かされ、足を早めて家路へ急ぐ秋の暮、常に彼と行住座臥を相俱にする吾人には、自から彼の心を判断し得るに難からず、殊に再昨年の中旬征露の途に着きてより、一入彼と親みて未だ知りも得ぬ野や山をおちこちとなく駆け廻り、冷き露營の夢も物かは氷れる月を身に浴びて眠り兼ねたる眞夜中も、彼が勇ましき嘶聲に旅情を慰め、あるは數句降りしきる雨の日の何れか河と定めなき、深き流を助け合ひ、辛くも渡り得し折など事に觸れ物に觸れ何づれか彼の心を判断するの種ならざるべき。

實にや我が身は駒が命にて駒は我身が命なり、かくて食ふ時眠れる時の差別なく、

常に彼と俱に憂も辛さも嬉しきも分ち合ひて、所謂世俗の同心と化し去る自然の興趣、さりとは面白きものにあらずや、いでこれを數項に別ちて臚述せん哉。

馬の感情

肉を喰ひて生存する獸ならぬ彼馬は、彼の犬猫の如く感情の酷だ強きものならねど、しかも牛羊に比ぶれば、一層感情の強き事は、予の説述をまたす、業に讀者の知れる處ならん。

されば嬉しとて犬猫の尾をふり軀を動かして宛然嬉しからんやうに人々にも見得る如き形狀を顯はさず、又悲しとて得絶へぬ迄に立騒ぐが如き、女々しき振舞は現はさねど、しかも友と離れて、唯獨りとなりける折、いみじくも、足踏み付けて友の行きける方に急かんとするは、馬の持てる特性なり、而して又何れの馬も恐怖の心に富める事は確的な事實にして、些々たる物事にも案外に驚き怖るゝが故に、此心を知らぬ者は遂に彼の爲めに過たれ、或は咬まれ或は蹴られ、終生償ふべからざる不具者となれる者少なからず、されば苟も馬を扱はんとする者は始めより克く茲に注意して取

扱ふ可し、又彼馬が甚しく恐怖したる時は、氣狂ひて馳せ出し、はては己が眼の見えぬ迄になりて、遂には河に落ち谷に蹈る事さへもあり、然れば該特性たる恐怖心を起さざらしめんとするは馬を扱ふ者の最大肝要條件にして、若し幼時より恐怖せしめぬ如く取扱ひたらんには、彼馬は克く飼主に馴れて怖しきものなどある時は、常に飼主の方へ軀を寄せ來りて憐みを乞ふ如き姿見え、いとく愛らしきものなり。

又馬はかゝる恐怖の心強きにもかゝらず、極めて寛容の性質を有すること可笑しけれ、そは彼が命と頼める最とも樂しき飼量を喰む時、何處よりか小鳥の飛び來り、彼が食槽の椽にとまりて、無遠慮にも其麥を啄み氣遣はしげに四邊を眺め廻はせとも彼はこれを追ひ拂はん氣色もなく、又小鳥去りて後、小鼠の出て來りて急ぎそが食をうばひ食するも、彼は尙依然として關せざるか如く平然として空うち眺め、一向心にも止めざるか如し、又急ぎ馳せて行く大路に當り、小犬の負けしと走せ來り、何思ふらん頻りに前肢に飛びつき或は後肢に咬みつかんばかりに立騒ぐとも、彼は耳さへ動かさずして早く、馳せ行く姿の實に面白き節ありて、心寛容ならずむは、到底此の

如きを得んやと、徐ろに予等をして感嘆惜く能はざらしむ。

然り而して彼馬は如何にして喜怒哀樂の情を表し得るかと云ふに、多くは其耳と眼に依りて察せらるゝか如く、古人も心耳氣眼なと謂ひければ、誠にさる事なりと思ふ、次には嘶聲によりて知り得るか如し、而して又彼は嘶く時必ず己か耳と眼の平常の姿ならぬ事なり、そは友を呼びて嘶き郊野を思ひて嘶く時は、其方向に耳を立立て、彼方をにらみつゝなき、又怒れる時は耳を後方にたふし眼も怒りたる姿にて一入高く嘶くなり。

實に彼の飼主の來たるを喜びて嘶く時などは、いとく可愛ゆきものにて、耳を前に向け恰も响々として何ものをか嗅ぐが如く、近づき來りて細く嘶く時は、覺えず彼の頭を撫で慰むるの情押へ難きものなり、况や嶮しき山をあえぎつゝ登り果して後の嬉しき駒の嘶、あるは踏み迷ひてとやかくと捜し得て、知れる道に出し時の彼か嘶とても命はと懸念せし濁流を渡りて彼岸によぢ上りて、水ふるひしつゝ、一聲高く嘶く聲、實に忘る事の得能はぬ迄心良きものなり。

尙ほ馬術叢説と云ふ古書に馬の嘶鳴辨と題せるものを載せありしか、誠によく馬の嘶聲を識別しありければ左に記載す。

馬の嘶鳴辨

嘶鳴は馬の發聲なり、羣丸の去れるものと牝馬とは嘶聲すくなく、且つ其聲低し、凡馬の嘶は感情の發動異なるに従ひ五種の發聲をなす。

其一 是喜樂の時にて響、漸く高く且つ長く終に鋭き聲となる發聲後、脚を擧げて地を踏み又把く、然れ雖決而蹴る事なし。

(脚とは前後の肢を指すならん)

其二 慕好の時、例へば牝を戀ひ主人を慕ひ、或は舊厩を思ひ、或は郊野を歩するを思ふなどに發するものにして、響極めて長く終り最も大聲となる、而して脚は地を把打する事なし。

其三 怒る時の嘶聲は縮み且つ急にして鋭く脚は地を把き後肢克く蹴る。

其四 恐懼の時は聲促急、烈しく鼻孔を擴開振動す、恰も獅子の吼るに似たり。

其五 痛苦に由て嘶する時は聲粗大にして呼吸と共に發生す其狀駭するが如し。

以上五種の異聲を發するの外成熟期に達すれば嘶聲一變すること人に異なるなし。

馬の記憶力

馬は記憶する事の甚遅きものなれども、一度び記憶したる事は、なか／＼に忘れぬ性なり、とりわけて道路を記憶する事は尤も早く、これを忘るゝ事甚少なきものなり、彼の騎手が山中にふみ迷ひ、行衛も分かずなりし時、韁を緩めて彼の行くか儘にまかせんか、彼は屹然として耳をばだて、しばし打案して後徐ろに歩み出づるに、大方其道を違はざる事多し、されとは寧ろ馬の記憶力と云はんよりはその方向を捜し得る一つの特性と云ふべきならんか、古より老馬路を知るなど云へる事も數多く見出されたり、殊に戰敗れて落ち行く武者の、わざと老馬を選びしなど源平盛衰記にも記るしあり。

馬は此道を記憶する事の早きに伴ひ彼は永き間これを忘るゝ事なし、即ち二、三度訪れたる家の前を通り過ぎんとすれば、彼はたとへ三四ヶ月前に訪れたる家なりとも

其門前に駐りてしばし進まぬ事あり、又或人の説には嘗て二度過ぎける道を八年の後に通りけるに彼は能くこれを記憶しつゝありしと云ふ。

又飼主或は騎手などを記憶する事も亦甚だ遅けれとも一度び記憶せる後は、長くこれを忘れざるためし少なからず。

こゝに此記憶力につきて面白き例證あれば記さんに嘗て某地に十一才になれる牝馬あり、彼は右眼の失明したる後に至りて懐妊しけるが月満ちて、つゝかなく子を産み落し、毎に愛育しつゝありしか、生める子の已か右方に至れる時は、彼の天性たる恐怖の心より、眼の見えぬ爲めおそろしき者の襲ひ來りしとや思ひけん、驚きて數度愛兒を蹴りしかは、あはれ可愛の兒は無慘にも母の蹄にかゝりて遂に死したり、その後彼馬は我が愛兒の見えぬを氣遣ひて、頻にこれを捜し求めたれども、己が蹴殺したる者などが見當るべき、彼馬はこれより大なる悲みに沈むの情ありしか、遂に其所縁を悟り得たるものゝ如く、又諦め得たるものゝ如くなりしか、其翌る年も亦彼は妊娠して兒を分娩しけるが、二度は奇しくもよく心して彼愛兒を撫育し、其兒馬の己

か右側に至れりとして彼は決してこれを蹴るが如き事なく、恙なく育て上げ、その後更に二頭ばかり分娩せしかど、彼は以前の過を能く記憶して、是亦恙なくて育て上げたりと云ふ、嗚呼彼が記憶力の點かく正確なる去りとは愛すべく掬す可きにあらずや。

馬の智力

馬の智力は彼犬猫の如く穎敏ならずと雖、しかも能く飼主の聲を聞き分けては既に走り出て、或は騎手の聲を聞きつけては、聲高く嘶きて己が在所を知らすなど、以て其智力の發達せるを認むべし、而して又彼は巧に頭絡を脱して逃れ出て、萌え出づる若草に悠々糧を齎り、或は麥袋の底噛み上げて、殘食の粒を喰ひ盡し、又は飼桶の一方の綱をさりととして、便利よく食するなど世人の既に了知せるが如し。

前行く人を見ては前肢を上げて食を乞ひ、大口開きて頸さし伸ばし、麥給はれと云はぬばかりの姿せるなどなかくに愛らしくも亦小賢しけれ、殊に喇叭の響聞きわけて集り來る牧場の新馬、見るからに其姿愛らしく、其智力の牛羊などの遠く及ぶべきに非ずと思ふ、又彼の躍乗馬か長鞭のありさまを見て、各種の運動をなすが如きは實

に感嘆の外なし。

嘗て某乗馬隊に雑種馬ありけるが、彼は毎夕巧に頭絡を脱して逸れ出て、炊事場、酒保、集會所など經めぐり、人の面白さに種々の食物與ふるを、喜び嘶きて之を喰み、かくて已か厩に立歸るを常としきと、以上は唯た軍隊の馬匹につきての一二の例證に過ぎずと雖、彼の曲馬師の馬匹に至りては、世人の知れる如く種々なる技藝を演し、衆人に持囃さるゝなど、其智の如何に優れたるかを知るに足る可し。

又彼馬には數の感念をも有す、例へば三回廻りて後青葉を與ふれば、其次は三回目
に駐りて、青草を求めんとし、或は五固砂運びして其日の仕業を終る事となせば、彼
は必ず五回目の仕業を終りたる時に至り運動を停止して、更に又進む氣色もなし、か
ゝれば彼馬には少數の數と云ふ感念は、其記憶に存するを認むるを得べし。

馬匹の忠實

英傑俟才と世に謠はるゝ人も、忠實の心なくは世に置き處なく、よしや愚鈍短才の

者と雖、忠實の心だにあらば世に重用せらるゝ事多かるものなり。

馬は何の種なるを問はず、皆該忠實の心に富めるは疑もなき事實にして、時には吾人の耻かしと思ふ事さへあり、わけて其行ふべき業を命ぜられたる時は、假令其身死すとも止まざるに至ては、殊に感すべき彼の特性と云ふ可し、さてや其實例を左に語り出つべし。

長途の行軍に人も馬も勞れはてゝ、而かも炎天やくか如く、熱せる破塵はなやめる人馬の面をうち、汗なす顔は色つきて、宛然土人形の如く、豁と開ける雨の眼は異様な光を放ち、喉は涸れはてゝ溜息吐き、されと懣ふべき木立さへもなく、清冽たる水さへなければ、馬に水飼ふ事も得叶はぬ、慘憺たる彼の滿洲の野原、

折しも突如として公命に接し、又も不憫や愛馬に一鞭あつれば、駒は蹄を早めて、早や五里ばかりある某司令部に向はんとす、しかも一里ばかりの程は、急ぎ／＼て走せられど、遂には息切れてしばし歩みを静めんとす、されとかくは、示されたる時刻に處命の場所に達し難しと思ひたれば、苦しげなる己か愛馬、命と頼める我か駒に

又もく一鞭あつれば、彼は殊勝にも耳ふり立て、以前の如く走り出し全軀汗にそみ、息づかひも荒々しくとくく歩を續けんとす、しかも已か轡を少しにても引きたらんには、彼は蘇生せるかの如く嬉し氣に歩みを常に復しぬ、かくてあるべきにあらねは又も鞭を上くれは、彼は勞れきりたる肢を上げて、とく走る姿、實にあはれともいぢらしとも譬へ方なく、あはれ人なりせば何とや云ふらん、息つかれ足重くして逆も行けじと倒るゝならん。

されど馬は命のあらん限り、息の續かん迄走りて止まぬ心根こそ實に彼か忠實なるしるしなれ、かくて漸く某司令部の入口に至りし頃は、息も絶えぬに門より入りかくて馬より下りけるに、あはれく忠實なる愛馬は遂にその場に倒れたり、「嗚呼彼は誠に忠義者なり」「噫々立派なる心根」とわれは思はず絶叫せしか、重き使命を帯ふる身の、なかく愛馬の側にある事も得ず、心のこして人に介抱を頼みてとく使命を達しかくて尙ほ心せかれつ忠義の愛馬か許に走り着き見るに、彼は兩眼を閉ぢて息もたえだえなりき、されど懇ろなる獸醫の手當宜しきを得てもとの姿に復りたれど、彼が一

身を賂して迄も、生命を果たさんとする忠實なる心根を想ひやれば、われは毎に情迫り涙潜然として禁じ難きなり。

噫此美はしき心は、わが經りし驗のみかは、多くの人の常に語り出つる處にして己か知れる今ひとつの哀れなる譚を記さんに、

嘗て某隊に日頃咬み或は蹴りなとする一頭の鹿毛馬ありけるか、一日重荷曳かせて嶮山峻路を過ぎ行きけるに、誤て車と共に谷底に陥りたれば、急ぎ谷に下りて漸くにして馬も車も引き上げたる後、馬や車を篤と調べ見たるに、さしたる負傷も破損もなければ、喜び勇みて又も其儘繫駕して例の重荷曳かせつゝ、歸途に着きしが、其途中少しく馬の歩みの常ならぬ様覺えたれども、さしたる事にもあらざるべしと、馬の曳くかまゝにまかせて、凡そ二里ばかり歩ゆませて兵營に歸り着き、兵卒等は何氣なく繫駕を解さけるに、馬は直ちに其場に挫と倒れ伏したり、這は如何にしけんと思ひかけて、起さんとすれど彼は全く兩眼を閉ぢて息さへなし、不思議の事やあると、急ぎ獸醫をして診察せしめたるにあはれ遅かりし、彼は遂に死せるなりき、後に獸醫の語る

を開けは彼は谷底に陥りたる時、腹部に異状を生して其歸るさ益々變動を來し遂に斃れしならんと言ふ。

吁思へば、日頃は悪馬など呼ばれたる彼のしかも其が心は比ひなき忠實なりけるなり、況して谷より上りて後の腹の痛みをこらへて、二里の長途をしかも重荷を曳きてよくもかへりける事よと、思ふだに涙の種ならぬはなく、兵卒も泣き獸醫も泣きかくて其馬はいとど叮嚀に弔らひやりたりと言ふ。

要するに馬は己が身の苦しさも痛さも忍びて、かくの如く只一筋に、忠實に其任務を盡さんとする、美はしき特性を具備せるを思ひ出すれば、萬物の長たる吾人は實に彼に對して愧死す可きなり。

戦争と馬匹

國家が國權を維持する爲めの戦争に於て、馬匹が如何に其勝敗を支配するかは、實に驚くべき程度にして、吾人は這回の日露戦役に於て、益々其影響の偉大なるを悟り

得たり。

夫れ戦鬪の勝敗は幾多の原因に依て決せらるゝものにして、其原因たるや實に深遠なりと雖、今茲に之を述ぶるは其範圍外に屬し而かも吾人が研究を盡し得たるにあらざれば、こゝに是を省きて軍馬か如何に戦争の勝敗に大關係を有するかを説述し、同時に偉大なる効果を呈して斃れたる最も忠實なる軍馬の末路につきていさゝか記する處あらんとす。

今茲に假に兵力、兵種、士氣、訓練、兵器及指揮官の腦力等凡て同一なる兩軍が同様な地形に於て會戦したりとせんか、此勝利者は正に良好なる馬匹を有せる軍隊に歸着するや明なり。

夫れ彼我の騎兵が衝突したりとせんか、兵力と兵器、訓練と指揮官の隊伍運用法及地形の同一なるを以て其勝利は必ず馬匹の良好なる軍隊に獲せらるべく、即ち馬匹の速力に於て衝力に於て敗者が敗を招くの致す處なり、茲に於てか敗者が軍隊の騎幕は破られ、後方の情態は露出せられ、勝者は益々勢を逞ふすべく、敗者は恰も盲人の杖を

折られたるが如く、常に其進路を誤り方面を失し、益々盲者たるを發悟すべく、最初の一撃に於て敗をとりたる、而かも航海者の羅針盤を破壊せられたる一弾は、實に全般の士氣に關し、はた將來の畫策に及ぼし、兵力の運用に一頓挫を來し、今後の勝算たるや誠に僅少なりと云ふも過言に非ざるべし、然れ雖戰鬪は尙ほ繼續せらるべく、既に騎兵戰に於て全勝を得たる彼軍は士氣頓に上り勢益々盛なり、加之勝者の砲兵は馬匹の良好なるによりて、敗者より速に陣地に放列をしく可く、而かも目標の偵察完然にして機に先ちて發射する砲彈は、着々劣者の軍隊に命中する場合に於ても、尙劣者は馬匹の不良なる爲め、砲車は未だ陣地に達する能はず、馬は奮然として前肢を上げて努力し、兵卒は馬を補けて勇奮至らざるなしと雖、如何にせん劣等馬は遂に其速度に於て勝者の馬匹に劣れり。

○此時機この貴重なる瞬間に於て指揮官は齒をかみ、兵卒は涙をながし、力のあらん限り働けども、體軀矮小なる馬匹のなか彼れに及ぶべき、見るがうちに馬は敵彈に傷き人は其容さへとゞめず、戰は今や其初期に於て既に我損傷甚大なり、漸くにして

劣者の砲兵も布陣し着々砲彈を報ゆるの時、歩兵は始めて力づきて戰鬪すべくこゝに於て漸く對等の勢に至りたりと雖既に其初期に於ける失敗、即ち砲兵の布陣遅きは實に全軍の士氣を沮喪せしめたる甚しと云ふべし、然れども戰は今進行せらるゝとせんか、彼我の戰鬪正に酣にして、砲聲轟然百雷の一時に落下するが如く、よしかりに劣者も戰運を挽回して、彼我相互に勝敗を決するの瞬時となさんか、馬匹の良好なる軍隊は後方の運轉、機に投して時を逸せず、砲彈は意の如く着々前送せられ、小銃彈も尙充分の餘裕ある如く送致せらるゝを以て、この勝敗の分れんとする刹那、敵火は勢益々猛烈にして、天地も爲めに動かんばかりなり、然るに劣等の馬匹を有する軍隊が後方運轉は如何、數十回の往復と休憩なきの輸送に馬力おとろへ、氣力失し、次第に其速度は緩み、或は缺馬を生じ、遂に行進する能はざる迄に勞れはてたれば、戰線の彈藥は逐次缺乏を告げ始めぬ、惜哉砲火は次第に萎靡し、火線は自然に衰ふるのやむを得ざるに至り、劣者の軍隊彈藥を求むる事誠に急にして、彈藥前途の嚴命至る事最も頻なり、今に於て彈藥の到着せざらんか、可哀劣者の運命は決せらるゝなり、この危

急に於て劣者が後方軍隊は實に死を塔し命を致し、勇奮努力百難萬苦倒るゝ馬を起して進み、傷つく馬を補けては行き、一步一步一刻一刻に其行程を進め、將卒も馬匹も皆全力を盡して唯命のあらん限り務むると雖、如何にせん數日來の戦闘準備と今朝來の絶えざる輸送、糧も食はず眠も消さての此輸送、人は氣力によりて歩むべく立つべしと雖馬は全力を使ひ盡し亦立つ能はざるに至りぬ、されば馬に鞭打てども進まばこそ、口曳けとも行かはこそ……指揮官も策つき遂に馬を捨て、人力を以て彈藥の輸送に決し、一箱の彈藥を二人して辛ふして運び得るに至りたるも如何にせん行程尙遠く時機は遂に逸せらるゝの止なきに至る、こゝに於てか勝者は我火力の衰頽に乗して、益々猛烈に砲火を浴せかけ愈々盛に小銃火を集注し、遂に全線勇ましき鼓聲の間に壯烈なる突撃を演し始めぬ、此危急この悲運を目視せる劣者は如何にせん、既に彈藥を射耗しこの尖鋒に酬ゆる事能はず、唯無念の涙切齒のくやしみに劍によりて最後の決戦を試むるも今は其効なくて、全く潰走の止むなきに至り、勝ちほこりたる彼軍は勢愈々猛けく、優勢の騎兵を以て追撃誠に急にして、劣者が泣面^{なみづら}を馬蹄に蹂

躪さるゝも唯銃劍を以て抵抗するの一事あるのみ、到底戰機を回復するの術策なく從て、騎兵は劣等馬に擊駕して退走する砲兵を襲撃して一擧に其砲を分捕し、尙進而後方に至る其勢當る可らず、此の如くにして敵砲兵は陣地を變換して退却する劣者が縦隊に向て砲火を集注すべく、眞にこれ敗者をして愈々潰走に至らしむるものにして、又再び立つ能はざるなり。

吁々是皆この馬匹の優劣によりて生したる結果に外ならずして其慘たるの情思はず身に粟を生せしむ、思へば馬匹か戦闘の勝敗を支配する事實に偉大にして唯驚くの外なし、而かも大戦争に於けるや數十日數閱月の戦闘準備は、馬匹の力による事愈々大にして、糧食、被服、衛生材料より各種の兵器機具に至る迄皆なこれ馬匹の力によりて前送せられ戦闘の準備を整へらるゝなり、馬匹一度び斃れんか直ちに糧道は絶え、將卒は戦はずして餓え、馬力衰へんか、被服の前送は遲滞し又將卒は霜になやみ、雪に凍ゆ、思ふてこゝに至れば馬匹の力最も偉大にして其優劣は實に兵力に關し士氣に及ぼし、火力に景況を來し、遂に絶無の勇をもてる兵卒と秀拔の智謀を有せる將士を

して其勇をふるひ、其智力を表し其膽を示す能はざるに至らしむ、實に馬匹の力の偉大なる眞に／＼驚く可く、されは馬匹は國權を維持するに大なる關係を有すると云ふも亦過言にあらざるべし。

然り而して以上の如き重大なる任務を有せる馬匹の末路は如何、其最後は如何、吾人はこれを日露の戦役によりて記載を重ねんとす。

戦争が馬匹の體力に依頼する事は前すでに述べたる如く偉大にして、劣等の馬匹を有する軍隊の憂慮も亦察すべきなり、日露の戦役に於ける彼我の馬匹は如何、惜むらくは我軍の馬匹が彼に比して大に劣等なりしは、既に世人の認知するを如何せん、しかもこの劣等の馬匹を以て編制せられたる我軍は、他の諸點即ち士氣、訓練、膽力、指揮官の智謀、加之一種燃ゆるが如き愛國心即ち大和魂はよく連戦連捷を得せしめたるなりと雖、彼の優秀なる馬匹を以て誇りたる露軍に對して能く唯々として働きたる我軍の馬匹が勞苦と困難も亦實に甚敷きものなりき、然れ共我はこの哀れなる馬匹に對し非常なる力を要求するの止を得ざるに出でたるなり。

思へば會戰の當時戰場裡、危険の光景悲惨の情狀交々至り、戦友はたふれ、隊長は傷き、彼處にも此所にも或は傷き或は倒れ、肉飛び血流れて、彼我の火聲は益々猛烈にして、劍電彈雨危急切迫、勝敗將に歧れんとするの時に於て、十字の旗は血なま臭き戦風にひらめきて、彼方にも此方にも急き馳け廻れとも、奈何せん忠義に傷き倒れたる勇者を收容し盡すべくもあらぬに、いかてか馬匹の傷き倒れたるを顧みるの暇あらんや、是れ眞に止むを得ざるに出づると雖、馬匹の慘狀又可憐の情に堪へざるなり、戦闘の大勢は決せられ、遂に我軍の勝利に歸し、生き残りたる勇士はこの忘るべからざる戰場を見捨て、勢立ちて敗走する敵を追撃す、吁思ひ出づれば皆涙の種なるよ、血腥き風は徐ろに吹き送らる、此戰場……敵も味方も克く働きて斃れたる此戰場、兩國の勇士何れも／＼皆忠義に斃れたる洵國の義士が枕ならべて倒れたる、或は無念さの齒をかみ切めて斃れたる……或は思ひ残す事の無きが如く笑ふて死地にくく幾多の將士眞に／＼櫻花の散りたる如き潔き打死、その中にまだ息の通へる傷者のうなる聲……人の子、人の親、人の夫、人の兄か斃れたる間に、物言はず

四つ足伸して斃れたる忠實の馬匹、全軀血にそみて形定まらぬ馬匹、砲聲は次第に遠ざかると共に、一時に焚え出づる敵の陣營、敵の倉庫くら今日は將に暮れかゝりたる黄昏時に、赤くく燃え立つ火のひかりは、廣き戦場の荒野をてらし、悲慘の屠に映つるこの光景、筆も繪もこの眞を寫し能はざる一場の修羅場……。

嗚呼この時戰場掃除隊は忽ちに編組せられ、忠義にたふれたる洵國の勇士か屠は親しき战友か心からの涙もとりかたづけられ、嗚呼立派によく死てくれたと云ふ隊長の涙聲と共に葬られ日ならずして彼我のなきからは厚き埋葬の式を擧げられぬ。

されど去れど今尙ほ戰場に其死屍を晒すは、哀れ彼の物言はぬ馬匹、而かも忠義に斃れたる彼にして、兩にうたれ風に曝らされ、肉腐ち骨露あらはに、野犬徒に群かり來りて、頭を咬み股をえぐり、餓えたる鳥は飛び來りて、其眼をぬき肉を刺す、何ぞ夫れ可憐の極ならざるや……嗚呼……。命限り働きて忠義に斃れたるこの殉國の動物を、血あり涙ある者の傍觀其場を去る能はさらしむ又宜なる哉、然れども戦闘後の整理は猶ほ酷だ繁多なり、これを埋葬するの時機を許さる事もあるべし、然りと雖今

や平和の光燦ひかりとして殉國の勇士が忠魂は懇篤に祀祭せられ、凱旋の勇士が胸には爛たる勳章を佩用するの時、よし彼獸類たる馬匹にもせよ、彼か忠魂を慰むるは情に富む吾人の義務たる可く、予は寧ろ彼の爲めに一大社寺を建設し以て追福を致したきものなり、吁馬匹にして言を發する能はしめば將た彼は何とか云はん……思へは實に可憐のものにあらずや同情の感なからずや。

尙ほ予は最後に一言せんとす、曰く戰場に於て偉大の功勞を奏したて無事凱旋したる彼の徵發馬の現状は如何と、あはれ多くは各國に拂下けられて、今尙ほ唯々諾々として毎日飼主の爲めに働きつゝあるにあらずや、然り名譽ある動物は凱旋の後尙ほ一日も休む事なく常に人を乗せ或は重荷を負ひて働きつゝあるなり、吁世人はこれを見て如何の感かある、この有勳者に等しき凱旋馬の日々の勞働夫れ可ならん然れども尙ほ甚敷あり、見るに忍びざるものあるに至ては實に慘の極と云ふべく、乞ふ讀者は東京の馬匹てふ次頁に眼を轉せられん事を。

以上の如く軍國の爲め缺く可らざる馬匹、將來の爲め優秀なる馬匹を要求するの切

なる我國に於て、國民は男子となく、女兒となく、老幼となく、貴賤となく、此極めて有用なる、所謂國力の消長如何に大關係を有する馬の改良に關し、繁殖に關し、はた取扱に關し讀者は常に——大注意を拂はん事を切に望む。

國民と馬匹

男子は馬を知らざるべからず、馬に乗らざる可らず、しかも今世の男子克く馬を知るや、能く馬に乗り得るや否や、馬を知るに精粗あり、又乗馬するに巧拙あり、固より一般の國民に其精熟を求め巧妙を要求するに非されとも、我軍國の民は、馬の一般を知るを要すると共に、男子は皆喜んで乗馬せざるべからざることを勸告せざるを得ず、我國の男子皆馬に乗るに至りて始めて其馬を知り得べく、從て女子も亦馬匹の感念を有するに至るべきなり、予か觀察に依るに今の國民(東北地方を除く以下全)は、一般に馬匹に對するの感念甚だ薄さか如し、否寧ろ馬を恐るゝ人の多きを恨みとす、而かもこの惡弊の寧ろ中流以上の國民に多きに至りては、眞に嘆するの外なきなり、軍隊に於て

新兵の入營する毎に、一年志願兵の入隊する度に國民か如何に馬匹に對する感念に乏しきかを知るに最好適例を示す、即ち中等の教育を受けたる者、若しくは中等以上の教育を終りたる男子にして馬を恐れて猛獸の如く思ひ、彼れに近かよれば蹴り或は咬むものなりと信じ、近寄らざるに如かず、觸れざるに如かずと定めたるのみならず、彼の毛色さる識別を得ざるに至りては、其意外に驚くの外なし、東北地方は知らず、幾内中國に至りては、益々此惡弊の甚しきを感じるなり、人の親、人の兄か此の如く馬匹を恐怖するの結果日本馬も亦人を怖るゝに至り、遂に人と馬との間に大なる障壁を生じ、人は馬を恐れ、馬は人を怖れ、相互に其心を知る能はざるに至る、思へば軍國の爲め實に悲むべき現象なりとす、而して其原因たるや誠に遠き昔より來りたらんも、人の兒は幼少の時より、馬は恐ろしきものとして教へられ、東西を識別し得ぬ頃より「馬」なる語の次には「恐ろし」と云ふ感念を持たしめたるに外ならず、殊に我國の女子は、彼を恐るゝ事甚敷く若し路傍馬の繫ぎあらんか、其傍を過ぎ行く事もなし得ず、さては至急の所用も辨じ得ずして立ち歸る事さへあるは、屢々予の耳にする所に

して、婦女子の集れる附近にて遙かに馬の勇みたらんか、皆顔色を變して走り逃かれ果ては聲をはなちて泣き叫ぶものさへあり、かゝる馬恐ろしき婦女子が、人の親となりて其兒を養育するに於ても亦日常に於て愛兒か馬を見て喜ぶ毎に、其恐ろしきものなる事を示し、さては泣出せは馬の恐ろしきをさととして其泣を止めんとするに至りては、遂に其心裡に於て、馬匹を全く猛獸として是認するの外なきなり、又遺憾の極にあらずや。

此の如くにして成長したる兒は、途上馬に行き逢へは忽ち恐ろしと云ふ感念の高まりて泣きさけびつゝ家に還りて彼の慈母に其狀を訴へて泣くに至る、又彼か年稍長するに及んで小學校に通學するや又馬おそろしき教師に諭されて恐怖の心を増大す、何時かこの恐怖心を除去し得べけんや。

某小學校教師あり、生徒が馬に乗るを好んで、其乗馬するの可否を問ふ、答へて曰く「馬に乗るべからず、落馬せは怪我すべし、慎むべし」と又嘗て其校門前を過き行く騎兵あり、生徒は皆窓より顔差し出し、喜色滿面に溢れ其勇ましきを羨む、或

生徒の教師に向て馬の毛色を問ふ教師即ち答て曰く「始めのか赤馬、その次が黒馬其次が白馬」とかくの如くにして生徒は遂に馬の毛色を誤り記憶したるなり、豈噴飯の極みならずや。

予は地方教育の法を知らされは、勿論之に教育者を誹語するものに非ず、又教育者一般か、かくの如しと云ふに非らされども、某教師にしてかくの如きを實見せりと云ふを聞くがまゝ、思はず失笑を禁し難かりしかは、茲に此實例を引證して予か小國民の指導者たる教育家に向て十二分の注意を此馬匹に拂はれん事を切望して止まざるなり。否予は寧ろ以上の如き教師に向て、次の如き要求をなさんとす、即ち「男子は必ず馬に乗らざるべからず、馬に乗り能はぬ人は男の子に非ず」と迄教へられ度なり又生徒にして馬の毛色など聞きたらんか、此機を利用して充分に説明の勞を重ねられん事を希望するなり、即ち栗毛、鹿毛、青毛、葦毛等の如く、正しき名稱を教へられん事を望むなり。

以上の如く馬に恐るゝ事の甚敷國民は遂に馬に乗る事を知る者尠なく、從て尙武の

心を失ひ、軍國の男子を臆病ならしめ、以て馬匹を改良するの念慮を減ずるに至るのみならず、益々悪しからしむると云ふも不可なきなり、されば軍國の民は、馬匹の一般を知り親は子に教へ、兄は弟にさととして、馬匹に對する感念を發達せしめ、馬匹を取扱ふ事に慣れ、馬を乗御する事を知り、從て馬匹は一家の家族として飼養せらるゝに至らんことを願ふものなり、要するに幼兒は馬と遊ぶを樂み馬は幼兒とたわむるゝを喜ぶに至りてこそ始めて軍國の民、尙武の男子を育成せしむべく以て馬匹の改良を望むべきに近からんか。

東京の馬匹

一國の宰相を乗せて轍の音なく足輕ろやかに歩む良馬、身軍國の重任を負へる光輝燦然たる將軍を乗せて馳る駿馬、さては數萬の群集に聲かけられて幾千の金を増せられたる競馬の馬、あるは數十の乗客を積て全身に汗流しつゝとく馳る「ガタ馬車」の馬又は重荷背負ひて遅々として行く彼の駄馬、或は一頭にして五百貫以上の重量を曳き

息も絶えゝに坂のぼる彼の哀れなる輓馬。思へは東京市の馬は實に種々雑多なるかな、しかも予は彼のさんこくなる馭者が鞭の下行く哀れなる馬車馬を見る毎に、將た又可憐なる彼のやせ輓馬を觀る度に常に――其懸隔を思ひ差別を考へ、眞に其相違の驚くべきものあるを思はざるなし、されど彼の「ガタ馬車」は幸ひ電車の布設と共に其跡を絶ちたるを喜びとすれど、獨り尙ほ悲惨の情態を呈するは彼の重荷負ふ駄馬と重車曳く輓馬なり、而して彼駄馬は其數僅少にして途中往々之を認むるに過ぎざれども彼の重車曳く輓馬に至ては予か眼に殆んど毎日映する處にして、眞に可憐の情に堪えざると同時に、禽獸を思ふの情なき飼主、或は血に乾き涙に薄き馭者の心緒を憶はずむばあらず。嗚呼東京市の重車輓馬毎に幾萬の重量を輸送しつゝあるか、思へは實に彼等の爲めに同情の涙を禁する能はざるなり、尙見よ坂路多き都に於て豫想外の重量を曳き、しかも唯々として歩みを運ぶ彼の輓馬、或は嘗て一度び徵發馬として戰役に従事したるなきやを思へば、予は益々彼に對して可憐の情に堪へざるなり。

予は某日澁谷のほとり道立坂を行く重車輓馬に對し緻密なる注意を拂て觀察しき、

曰く彼の坂を越へ行く多くの輓馬は實に毎日其幾百なるかを知らず、しかもその内に殊に哀れなるは、車上直經十珊知長さ十米突計りなる杉丸太七八十本を積み、息あえぎつゝ坂上に向て上り行く一匹の鹿毛馬、凜烈たる寒風吹き荒む朝またき、全身汗にしみ惣身より煙立て遅々として歩みを移す其姿、實にすさまじくも亦哀にして、彼が重量四百貫以上の重荷を曳き而かも五分の一以上なる彼坂路を上らんとす豈なし得べきの事業ならんや、されど忠實なる彼鹿毛馬は全身に力を込め四肢にまかせて一歩／＼登り行く、然るに馭者なる人は唯導きの手綱もちて、後振向もすればこそ空うそぶきて鼻歌謠ひつゝ先に立つ其姿、實に無情とや云はん涙なしとや云はん、しかも彼鹿毛馬か至難の状態刻々に迫るに至りても尙一臂の力を貸さんともせず、されは馬は軀の疲勞と呼吸の切迫とにより遂に重車は坂の中腹に駐りたり、されど／＼彼は重荷の坂下に逸するを思ひ、兩後肢に力籠めて踏み締め、耳を聳て息いそがはしく、鼻動かし恰も馭者の補佐を求むるに似たり、車の駐りたるを悟りたる彼の馭者は馬を佐けんとはせて、後ふりむくと同時に、手綱もてさん／＼に忠實なる彼馬の頭となく

面となく之を亂打し、頻りに其怠弱なるを叱せり、されど如何にせん馬は今や勞れ果て、一歩も進み得ず、唯眼を閉ぢ或は開き、打たるゝ手綱を右に避け左に外すのみにて詮すべもなし、無情にしてしかも思慮なき彼馭者は此姿の哀れさを何とや見たりけん、怒聲更に高く「此畜生」と叫びつゝ、足を上げて重荷踏みしめたる力なき彼が前肢、あるは胸部の嫌なく、數回蹴りつけ猶飽足らで、腕を擧げて彼の頭を亂打する事殆ど數回……。嗟呼彼兩後肢に過分の重量を支へたる忠實なる馬匹は、馭者が怒聲と亂打の痛みに堪え兼ねて、更に一層の勇を鼓し、其重荷を曳き上げんとすれ共、如何にせん彼が呼吸は今尙ほ静まらず、彼が筋肉は未だ其力を伸ばす能はず、唯心あせり氣迫るのみにして叩けど／＼少しも動かず、果ては頭を垂れ頸を伸し、蹄を立て、地を搔き重車の動かざるに啼く計りなり、其狀其姿、實に／＼可憐の情に堪へざるなり、あはれこの有様を目睹したる予は、思はず走り寄りて……。嗚呼忠實なる動物よと叫びつ、汗なす彼が頸を撫て其勞を慰めつ、事の意外に驚きたる彼馭者に、其無情を説き、更に共力して此馬を補けん事を告ぐ、馭者は黙して手綱を放ち、漸くにして

兩輪を押し上げ聲を勵まして哀なる馬を督すると共に全力を注ぎて車輪を押し上げたり、智力ある彼馬は兩人の補佐を得て力つきけん、更に勇奮努力一聲の勇ましき嘶と共に、重荷は動き始めたり、機逸すべからすと、尙一層の力を加へ、聲を勵まし遂に異常なる馬の力によりて重車は坂上に達するを得たり、馭者は突飛なる禮を述べぬ、予は馬の頭を撫て肢をさすり、其勞の實に偉大なるを謝せんが爲め彼に近づきたり、吁々……物身の發汗燃ゆるが如き體溫、すさまじき呼吸、劇烈なる脈搏、而も肉落ち骨出て肋も算へんばかりに疲はて、蹄は伸び髪は亂れて長く、尾は白き迄に垢つゝ其狀真に見るに忍ざりしが、彼が臀部にAの印ありたれば、予は陸軍の拂下馬なるかを馭者に問ふ、彼曰く「戦争の歸り馬でげす」と……予は實に驚愕の外なきなり、忠義に働きて異國の雨に幾多の困苦を凌ぎたる、此の名譽ある馬匹をと、思はず長嘆息を漏らすこと數回。

しかも馭者は直にこの馬の行進を要求せんとす、無情、無實、鬼の如き人……と予は思はず叫ばざるを得たりき。

こは一場の例證に過ぎざれども、毎日毎時都の坂上る重車は其數幾百なるかを知らず、而かも皆以上の如き有様なるなり。思へば、東京の重車曳く輓馬、毎日幾千の鞭を受けつゝあるか、幾百度か悲惨の涙にむせびつゝあるか、これを馭し此の馬によりて毎日の糧を得る人、しかもこれを見てたゞ過ぎ行く人は思ふならん、馬は此の如き悲惨の狀態なる者なりと、噓々思へば可憐の馬匹よ物言はざる忠實なる馬匹よ、若し猫に車曳かせんか、其痛みに堪へざれば聲を放ちて泣かん、犬に重荷を負はせんか其苦しき時は悲哀の鼻聲を出して人の補を求むるならん、又道ゆく人も犬猫のこの悲みを觀ば、走り寄りて其犬を助くる男子もあらん、馳け寄りて其猫を抱き上ぐる女子もあらん、されど百難に泣かず萬苦に叫ばざる、この忠實なる而かも肉落ち骨出て、蹄は裂け眼は窪みたる勇敢なる動物を馭する人も將た又これを觀る人も、これを助け、これを慰撫せんとする者無きに至つては實に血なき情なき鬼に等しき人と云はざるを得ざるなり、何ぞ文明の國民博愛の都民と叫ぶ事を得べけんや。

於茲か予はかゝる無情なる馭者の爲め或は不實なる飼主の爲めに、一頭幾百貫以上

を車載或は駄載すべからずと定めたるなり、而して尙一ヶ月一回の蹄の改装をなすべきを命じたきなり、こは是彼哀れなる動物の爲めに多少の保護と自由とを興ふるのみならず又以て大に馬匹の保育に關し將來軍隊が徵發の多寡に影響を來し彼の戰爭に必要缺く可からざる馬匹、云はゞ軍國の活武器として、輸送機關の原動力として將た又斥候偵察の耳目として世人が充分の注意を加へ其取扱を至重すべきの止を得ざるものたればなり。

馬匹と俚謠

坂は照る／＼鈴鹿は曇る

あひのせき山あめが降る

極めて悲痛なる音調を以て、峠越しに謠ひゆく馬子唄、誰か之を聞いて哀感を抱かざる、殊に彼の有名なる戯曲染別手綱に於ける可愛の三吉が、慈母重の井に袂を別かたんとする時情知らずのしれ者にせがまれて、いとしゃ振り絞るあはれの聲もて、片

手に潜然として下る涙を拭ひもあえず、切々として謠ひ出すこの調該聲を聞いては、英雄も腸を斷つの思ある可く、かよわき女は涙の泉も涸れ果つ可し、實にや古來より馬匹に關する多くの俚謠の内、此の如く一面優雅典麗にして、しかも一面に於て頗る哀調を帯べるは少かる可し、然り而して彼の陸前地方に於て専ら謠はるゝときく

よくも染めたや馬追の浴衣

肩 に 駄 駒 裾 栗 毛

の如きに至ては、其幽に鄙びたる、しかも其無邪氣なる、なか／＼に捨て難き雅趣ある可く、又彼の和歌山地方に於て謠ふと云ふ

馬の鈴鳴りや馬子衆と思ふて

三 度 出 て 見 た 門 口 へ

の如き、日頃わが戀慕ふ愛郎、もしや門邊を通りやすると、さやかなる馬の鈴の音に、三度び門口へ駆け出てしといふ優さしの心、村娘のやる瀬なき戀を遺憾なく發揮せるものと云ふ可し、而して又彼の豊前地方に於ける

駒は名物風吹くたびに

ひんと嘶き尾筒振る

の如き、駒の勇ましさを思ひやる可く、其他伊勢地方に於ける

駒の瘦せたに重荷をつけて

これで越さりよか鈴鹿の山を

しかも月夜か、闇の夜に

の唄の如き、馬に對する情深さを愛す可く又彼の

忍路高島及びもないが

せめて歌棄つ磯谷迄

の古謡の如き、文字上に於ける趣味は少からんも、日暮れかゝる麓路、馬の鈴音と相和して、美音もて朗々唄ひ出づるを聞かば、恍惚として、塵外に在るのふもひある可し、而して以上掲げたる古謡の他、尙馬匹に關するもの多々あらんも、そは他日に譲りて近時世に持囃さる、彼の萬朝報所載の俚謡正調欄より、今代の人の馬匹に對す

る感想を窺ひ見んに

梅の小村へ春駒勇む

背なの荷物 は花嫁御

春の初荷に嘶く駒を

箱根八里にひくかすみ

駒か嘶く酒屋のかどに

主はいないて雪か降る

の三首の如きは尤も優美なものとするべく、又彼の戦場の勇士か愛馬を思ふの情と、偉大なる我か任務を重するの志とを相調和して、而かも戀愛に結びつけたる、最もめでたき正調は

泣てくれるな可愛の駒よ

今宵しのふは戀じやない

の一首に止めをさす可く、又彼の凱旋の將士か無上の名譽と恵み深き行賞を受けた

るにもかゝはらず、彼の百難萬苦を凌ぎて還りたる徴發馬は、今や民家に拂下げられ
て孜々重荷を曳く、此あはれなる姿をちもひやれるは

鞍の金具か朝日に光る

馬の勳章は是ばかり

の一首なる可し、此他近作尙多々あらんも、さまではとて之を省きつ。

馬匹と俳諧

古來馬匹か、彼寂^{さび}たる十七文字によりて、如何に研究され、如何に美化されたるか
を見るは、又いふ可からざる趣味を感ず、乞ふ左にこれを臚列せん哉、

駒迎へとて夏馬を水草清き山中に、のぼせて、名月の頃各家々に迎ふる事あり
と

駒 迎

提燈に蹴上の泥の駒むかへ

許六

山の端に月も地道や駒迎へ

佐角

里はまだ豆を引くらん駒迎へ

業國

牧の氣や關にかたまる駒迎へ

木公

萩に萩に辨當うれし駒むかへ

達奴

稻負せ馬の傳授や駒むかへ

童平

宗桂も關はゆるさし駒迎へ

云奴

駒牽し昔語ややつて茶屋

昌夏

高燈籠暫くあつて峯の月

北枝

十六夜やおくれて這入る駒迎

許六

新そばの信濃はなしや駒迎へ

全人

露雨や尾髪もふらす駒の旅

許六

平櫓の沓籠持や駒むかへ

全人

一戸や衣やぶるゝ駒むかへ

全人

甲斐駒や江戸へくと柿ふとう
駒曳や岩ふみたて、元箱根

其角

以上列記せる俳句は單に馬匹に關して詠まれたるものゝみなれど、又この馬匹にゆかりして詠み出でたるも、とりまぜて掲げんに

攝津伊丹の人、鬼貫のよみけるなかに

永き日を遊ひ暮れたり大津馬

一度富士を見て又夕くれによみけるは

馬はゆけと今朝の富士見る秋路哉

蟻道と云ふ人、身まかりけると聞て、鬼貫のおくりけるは

竹の穂はむかしの馬の夢路哉

久しく逢はさる人の京にのほりけるか、近き内に江戸へかへりなんと聞えし
名殘によみけるは

行馬の跡に花なし菊の空

又或人に餞別としておくれる句に

餅歌や君か歳暮の馬下りに

或年のくれ十三句よみけるなかに

年木めせ奥のおく山馬の聲

芭蕉翁の句中に馬のゆかりあるものをあくれば

馬をさへなかむる雪のあした哉

翁か甲斐の山中に立寄りて詠める

行く駒の麥になくさむ宿り哉

馬口付の男の子、短冊を得させよと乞ひけるをやさしの心とよみして、詠み
與へける彼の有名なる

野を横に馬引むけよほととぎす

馬も乗手によりて勇むものなりと、馬術の必要を詠みたる人あり

乗馬もよき鑑てやいさむらん

雲鈴と云ふ人の桃の花になごりをあしみて詠みけるは

あとむいて馬に乗らはや桃の花

又風瀑と云ふ人のよめる

朝霞馬のむせばん佐夜の山

西村元重と云ふ人の木曾踊を詠みて

信濃路の駒は春もや木曾踊

北村湖春が勢田の橋行きける時馬に乗る人の心得をよみけるは

我駒の沓あらためん橋の霜

騎乗する人には此心得こそ誠に〜必要なれ、又一昌の詠みけるは

松風にいねむりねむり馬追ふて

尚ほ左に吟者の名を忘れたれど、捨て難きふしあればあはせ掲げ置く

頼朝の馬冷し場や田歌聞

欠伸する小馬を拜むいなごかな

月清し駒のいるさのこがね原

甲斐が根のしげりは廣き厩かな

昔やらん辨慶さくら馬の鞍

雲の上のはく馬や七の星あしげ

又扇雪か秋の暮を詠みたるは彼の

秋の暮馬のあくびのうつりけり

扇雪

馬匹と歌謡

馬匹に關する我國人の心を知らんが爲め、馬をよめる古來の歌謡を集めんと思ひつきたれども、なか〜に意の如く搜し求め得ず、わづかに其一端を窺ふに過ぎざるは余の最も遺憾とする處なり、されば他日機を得て、この愛すべき馬を詠ひ出したる多

くの歌謠、詩歌、俳句、和歌など詳細に集めて之を世人に紹介すると共に益々斯の種の吟咏を盛にし、以て國民が馬匹に對する感念をして、愈々盛んにますく濃かならしめん事を思ふ。

神樂歌

(およそ桓武遷都より鎌倉時代の始めまで)

其駒、

その駒そや我に、我に草乞ふ、草は取り飼はん、轡取り、草は取りかはんや、水は取りかはんや、

或説

あしぶちのや、もりの、杜の下なる、若駒率てて、足斑の虎毛の駒、

催馬樂

こは唐樂、高麗樂と共に朝廷貴族の間に行はれたる一種の歌謠なり。

我駒

一段

いで我駒、早く行きこせ、待乳山アハレ、まつち山、マハレ

二段

まつち山、待つらん人を、行きてはや、アハレ、ゆきてはや見ん

青馬

青の馬放れば、取り繋げ真青の馬はなれば取りつなげ、凌箭矢の、箭雄子か孫なる、真郎子、真大膽子の、大氣の童の、さをこかひこなる、さいろんこ。

(次に記すは足利の末期より現今迄なり)

名馬揃

竹島幸十郎作

あつばれ御馬さふらふや、よさうまの吉相や、あつさまむかうよこはたばり、ししあ
いほねぶし、あつくりつくりつたる如くなり、尾は千反の布をはへて、百丈の瀧の落つ
るに異ならず、右の眼、左の眼、振分髪に、ちらりくちらりくくと、鞭はなに
く、紫竹漢竹唐竹若竹、本から末から根から葉から竹のきりきりなきりく、きん
きりよのやれたきり水、澄まず濁らず出ず入らず、人の心もそれによそへて、何も柳

にさらりくとも、やらせて軽いかよござんす、思ひはづふりづぶくとも、沈んださ、何がさ。

對面春馬

めでたやく、春の初の春駒なんどは、夢に見てさへよいとや申す、く、オ、く、それそれよい振神の、梅と櫻の其中々は、姿も年もあいけうも、つゝなとりなり可愛と申す、く、しやんと利しき出立ばえ、大よせちくの、其かりくらに、伊豆と相模の殿さん方は、あいざはやぎした瀧口ほうでう、かしはが峠におならびあれば、廻る盃よい中村と、名にし大場の朝歸り、降るは時雨か村雨月毛、しとくく、めしたる駒の手綱のいろは、赤澤山しちくの竹馬、はいく葉竹の竹馬、ささのみく、のけく、駒か勇めば心もいそく、轡の音かりんがらく、ひづめの拍子がしつとんと、壽き祝ふ花の袖、にほひこぼれて咲く梅の、枝移りして鶯の、囀る聲の拍子を揃へて、七草なづなく、これ人日の白馬の節會、春の小馬のいさぎよく、唄ひはやして祝しけり。

馬場先踊

松はゆたかに大手馬場先繫馬、かいつめたい今朝の雪、殿の御馬は鏗月毛、連錢蘆毛、鹿毛、糟毛、しとく打てはかけあをり、お江戸育のひげく男、御馬の口をしつかとさつりりんくひげ男、つりりんくひげ男、つりりんつり、つりりんく、りんくりんく、りんとはねたるひげ男、繫ぎとめたよ戀の關札

咲いた櫻

咲いた櫻になせ駒つなく、のほんほへ、駒かいさめば、のほんくほんほのん、いよいよ花かちるく

御馬屋關介

だてをこのみやる御馬屋のせき介、くるやら馬も馬もいなさき、くつわもなるに、次郎よ、太郎よ、どこにく、さて馬どんど、つくと、繫いだ、お寺の寺の柿の木に、づんぼろぼろく、まんとつくと繫いだ

馬匹と和歌

咲く花を眺めては懐を走らせ、照る月を眺めては心を動かし、あるは嵐吹く夕べ、
雨降る朝にも、常に一首の國風を誦して吟懐をほしいまゝにするは古來我國振りの美
點にして、吾れ人ともいそか濫輿を極めんとすれど、不思議や馬匹を主として詠ひ出さ
れたる數の多からざるは、予の甚だ遺憾とする處なり、去れど彼小笠氏の馬百種の吟
詠、或は大坪流の乘馬心得百首などは、其主なるものに屬すれども、わけて語るべく
傳ふべきは彼の

御 製

うちのりて雪の中みちはしらせし

てなれの駒も老にけるかな

の一首ならずや『てなれの駒も老にけるかな』と大御心を駒に寄せ給ふ深き御思召
承はるだにかしこくも亦尊とけれ。

而して又近く主馬頭藤波子爵の詠なりと聞く

國の爲め君のためをし思はずは

千里の駒はいかて出つべき

の一首の如きは昔藤房卿千里の駒生れ出てしとて、君を諫め奉り、其凶兆を説きた
るに引きかへて今藤波子爵は千里の駒を以て偶然の事に非ずとし、國を思ひ君を思ふ
の瑞兆となす、時代の變遷も亦大なるかな、又彼の

うつむちの下より走せて行く駒や

人の心に乗るにはあるらん

と橘千蔭か詠せるは、克く馬の従順なる心をうつし遺憾なきものと云ふ可し。又彼

西行法師が

望月の御牧の駒は寒からん

布引山を北とをもへば

と詠せるは馬に對する同情の涙涙めどもく盡さざる可く

又源義持がよめる

相坂の關たちいづる影見れば

今宵は秋の望月の駒

逢坂の關の清水に影みれば

今や牽らん望月の駒

空の上の光もありぬ望の月

名とむつましき駒迎なり

の三首の如きは、武將か望月牧の駒を詠ひたる而かも一種幽韻なる趣きあるべく照りわたる望の夜に家路に急ぎ牽きゆく駒の姿中々に能く謠はれたるもの哉。又彼

千早振甲斐の黒駒ひきよせて

乗りていさめる春日野の原

と、聖徳太子の詠じけん、春の野に若草もえ出つる頃、太くたくましき青毛の駿馬、一聲嘶て走るの状眞に目睹するが如し。

或は

春ふりき小野の御牧の若草に

ひれてたてるも春さきの駒

幼き駒の若草に群かり、春陽さらに暖かく、鳥なき花香る春邊の眞に一幅の繪巻を披くか如し。又彼

雲霧の立野の駒の香かも

けふ九重の門に出るらん

と詠せる立野の牧の名馬今や撰はれて九重のあたり、月をなかむらん勇ましきの姿、おもへはゆかしの詠ならずや、或は

夕暮の月よりさきに關こゑて

木の下くらき桐原の駒

逢坂の關の岩かとふみならし

山たちいつる霧原の駒

の詠の如き皆この馬の勇壯を詠ひ出せるものにして
みちのくの安達駒はあつめとも

けふ相坂のせきまてはきぬ

と源紋の歌ひけるは又彼駒の足はやきを賞したるなるべく、而して彼の大坪流馬術
の歌の中にて今の馬術とよく一致せるものをあぐれば

手綱しらてあしく乗るより乗らてをけ

さて乗る人に口をひかせて

馬の口人のおもての如くにて

似てにぬるものと心得て乗れ

はやる時如何にもまけて乗てのち

しづまりて後口をひくべし

口とあし此兩方をこゝろ得て

よく引のれば口やなほらん

の數首とす、而して近き頃の詠と聞くは

あん馬の御厩ならべる主馬寮の

庭もかしこし白梅の花

みいくさにめされし馬の故郷に

小田すきかへす春は來にけり

の如きは彼の徵發馬か君の爲め千辛萬苦を経て郷にかへり、尙且つ其主に盡す心根
をうたひたるものにして、おもひやるだに涙の種ならぬはなし。

日本馬の種別

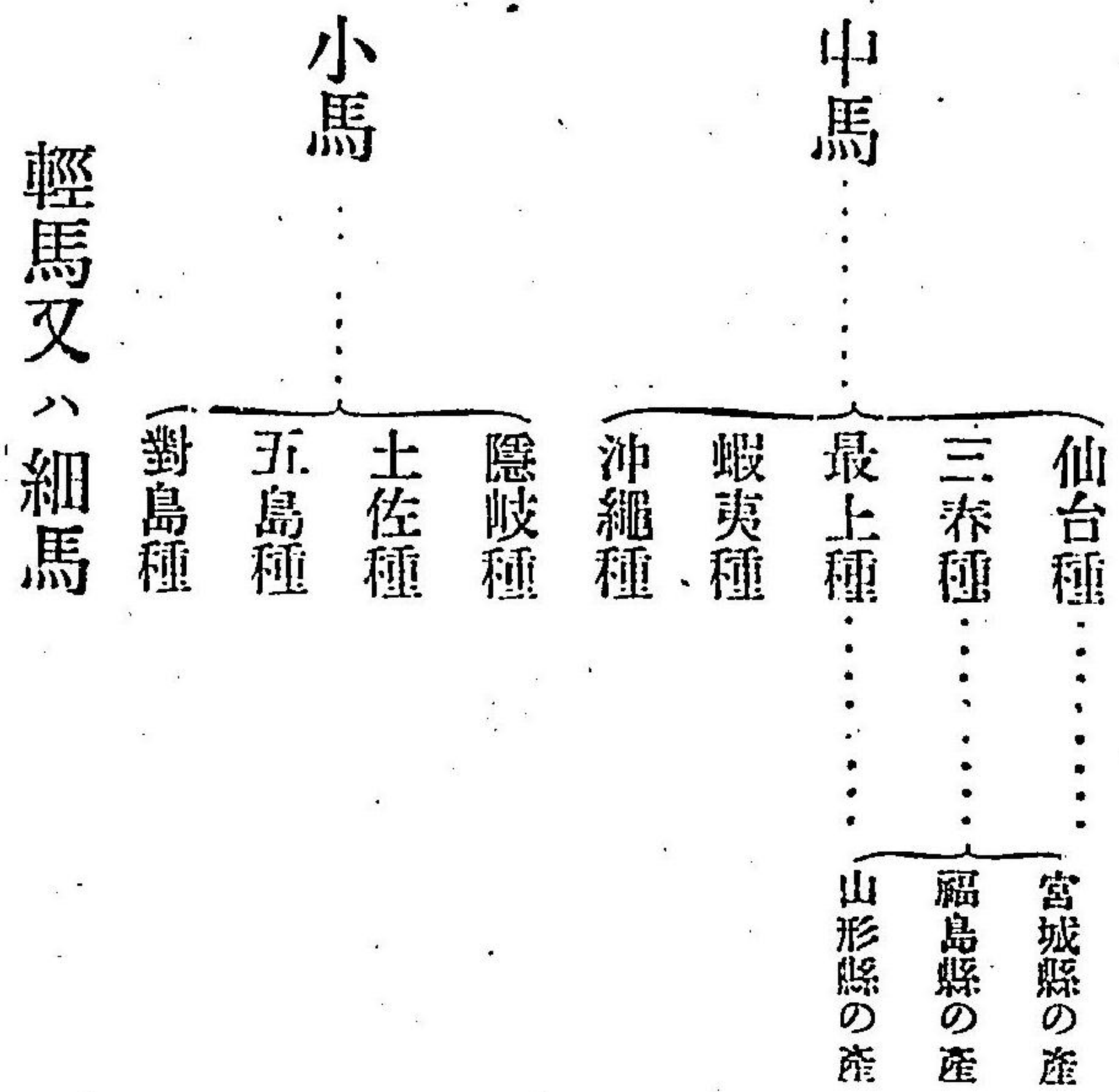
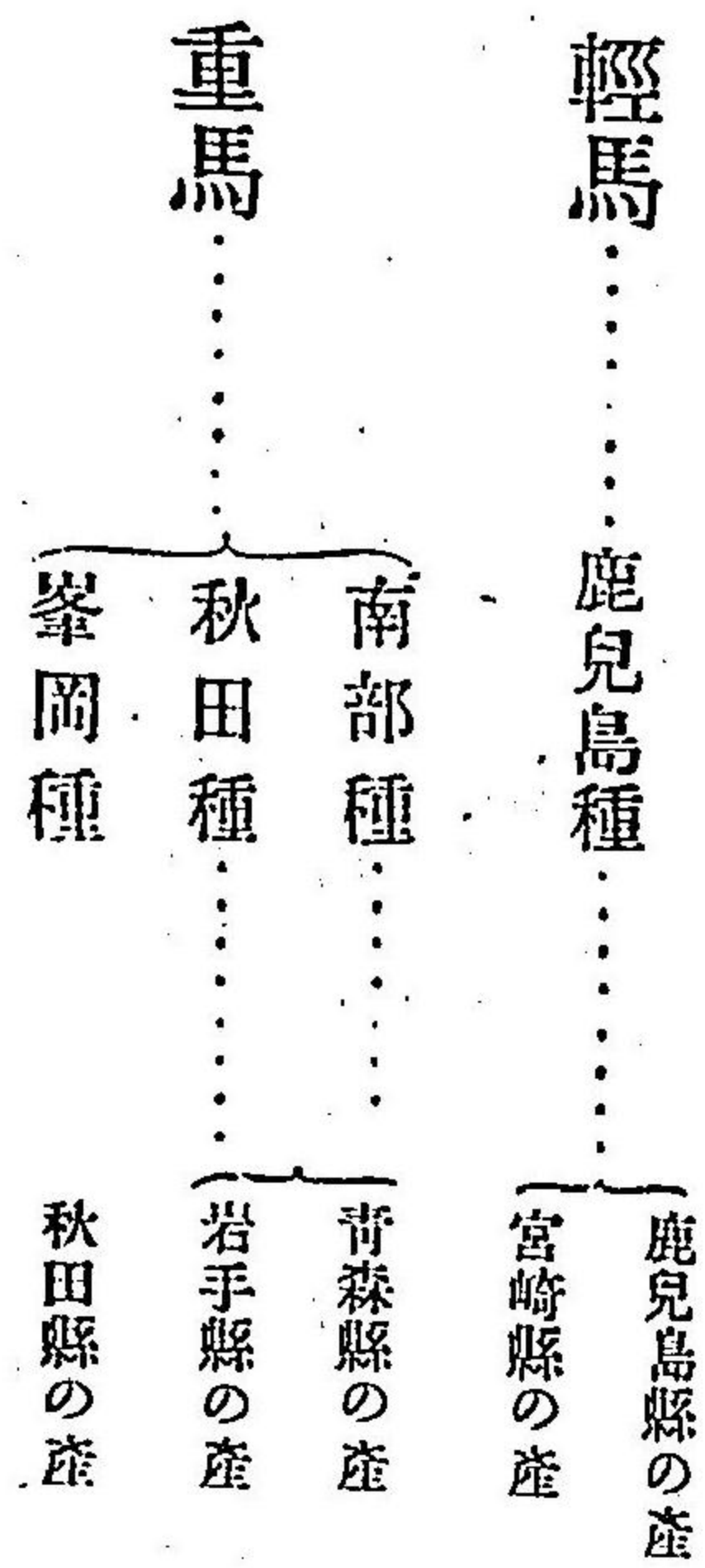
我國人か本邦馬匹の種別を研究し、其固有の種族を審かにし、其産地を究め、其風
土を察し、其地固有の草穀と習慣とを尋ね、以て其畜育の方法を講究し、長を探り短
を捨て、以て馬匹の改良進歩を策るは、最も須要なる一事なりと雖、こは既に今泉博
士の大日本馬種略に詳なり、依て今茲に全書に記載せる日本馬の種別を單簡に列記し

て此項を終らんとす。
全書に曰く

本邦方今の馬種たる素より固有の一種にあらず之を約言すれば、日本、蒙古、波斯、三種の混合なり、古老の其道に長せるものに聞く、維新に在ては南部、仙台、最上、三春、の四所を以て馬の本地となし鹿兒島を以てその次に列し各々明かに分別すべきの特状を有せり（中略）と、

之を要するに方今國內の馬を數別すれば左の如き概表を得べし。

日本馬種



輕馬又は細馬とは細緻麗秀なる馬種の謂にして骨骸の堅牢皮毛の艶麗體幹の輕健運動の遒勁等その特性なり、故に最も乘馬に適し又輕車を駕するに美なり、此種は乾燥不沃の風土に固有なる美産にして低濕寒冷の縣郡に在ては決して得べからずと（下略）

重馬

重馬とは輕馬に反す體格肥重筋骨剛強なる馬種の謂にして冷濕豐沃の地方に産す、此種は機速の用に供するよりも寧ろ之に力量の利を仰ぐものにして往々駿足の乘馬を出すと少なからずと雖概して言へば輓馬に適當するものなり殊に輜重兵車輛の運搬の如きは偏に之に頼らざるべからず、(下略)

中馬

中馬とは輕馬と重馬との中間に位すべき體格を稟有する馬種の謂ひにして中和乾燥の風土に適す、概して乘馬に宜しく輕馬に充つべきもの甚だ稀なり、(下略)

小馬

小馬とは體格極めて矮小なる馬の謂ひにして土佐、隱岐、五島、對島の四所古來之を産す、就中隱岐の産尤も優れり五島之に次く土佐種は頭巨大にして諸部の權衡宜しきを失ひ醜形なり對島種も亦卑陋なり概して小馬は軍役に適せずと雖四肢強健にして能く勞に堪ゆ、(下略)

馬匹の旋毛

馬匹の旋毛は其種類甚だ多く、従て馬匹によりて其趣を異にせり、故にこの旋毛によりて馬匹を區別するを得べく、即ち現今別徴として彼れの識別に用ゐらる、然りと雖古昔は此旋毛に依りて大に吉凶を論し禍福を分別し、馬商は頻に旋毛の良否を説き以て其價值を高下し、遂には庶人より武人に至る迄、甚敷この旋毛に重きを置き、爲めに世に得難き良馬と雖旋毛の不良不吉如何によりてこれを用ゐざるに至る、實に遺憾の極と謂はざるを得ず、吾人は旋毛の何か故にかく吉凶を來すかの理由を知らず、唯恐らくは一途の迷信家が、此の如き禍害を生み出したるに相違なかる可しと今更に惜き限とす。

されば茲に古人が論じたる旋毛の種類及吉凶を列舉して、讀者の一燦に供すると同時に、かくの如き無意味の空論に重きを置きて、あたら良馬を見捨るが如き事なからんを切に冀ふものなり。

古人は旋毛を別ちて左の如くせり。

- 一、吉旋十六
 - 二、中旋十六
 - 三、惡旋三十二、
- 計 六十四、

吉相の旋

- 一、蓬來の旋は珠目の旋の上に有り、二つ有は日月の旋、三つあるは三光の旋と云ふ最上の吉相とす、主人繁昌し人に尊敬せられ寶を得るなり
- 一、珠目の旋は額には惡敷旋あるとも此旋あれば凶を轉じて吉となす、家富て吉とす、故に漢には壽星の旋と云ふ眉丹の辻とも鐘木の旋とも書なり又は進富の辻ともいふ、これなきは忌事なり
- 一、華粧の旋と云ふは珠目の辻の下に有愛敬ありて萬民伏す木性の人に尤も吉なり
- 一、愛相の旋と云は鼻の上に有り主人勝利を得て、よき兵卒思ひ付なり

ず

- 一、富門の旋とは富來門とも云ふ口脇に有り貨福を得て家富むなり
- 一、愛憐の旋は面側にあり神馬奉納誓願等の節大吉とす、皮肉の内にありて冬は見ハ
- 一、見受の旋は胸にあり良馬の友を引き軍馬にては吉なり、轡槽の旋とも云ふ
- 一、人府の旋は喉にあり帶纓の旋とも云ふ所願圓滿なり
- 一、昌門の旋は喉の道中にあり友馬を引て子孫延年なり
- 一、福相の旋は鏡旋の下にあり五穀家内に集る
- 一、馴寄の旋は腰骨に有り心直にして主人に馴付なり
- 一、骨正の旋はつだ先に有り山道能く得たり
- 一、五の目の旋は腹にあり五つつらなる七つある時は七寶の旋或は七星の旋とも云ふ珍寶家に来り火災を除く
- 一、知領の旋は中ふしの下にあり俸祿を得名譽の相とす
- 一、驅分の旋は勝負に吉なり但向爪の上にある

一、尾殿の旋は尾の脇に有り難なし

中旋の部

一、竹葉の旋は耳にあり人をちとす相とす聲のあらき多し

一、破勢の旋鞍下に有り夜道に悪し常は別事なし芭蕉の旋ともいふ

一、血酔の旋は耳の根にあり上熱する事有り上悍の馬にあり

一、波切の旋はあひにあり水を能く游くなり

一、草分の旋は波切の下に有り善悪なし

一、大見の旋は書物を見る相とす然れとも逸物なり、

一、轡搦の旋は兩口の少し上に有り物に添ふころ有り

一、津洩の旋は頭をふりて立つころあり

一、帶圍の旋は額の下に有り水を得てぬ馬と云へり

一、肌搦の旋は尻に有り息相のころ有と云ふ

一、鐙の端の旋は鐙の鳩すりの通に有り主人位に昇と雖、廻し口悪敷と嫌ふ人有り踏

出の旋とも云へり

一、乳元の旋は横腹に有り早くつかるゝ馬といへり

一、蹄通の旋はひはら泥障の下にて乳元の下にならぶ、人を蹴たがるころあり又汗

しぼりとも云ふ

一、地境の旋は飛節の上にある事よし然れとも嫌ふなり

一、沙流上の旋は飛節の下に有り出水を得たり乗相の悪心ありとて嫌ふなり

一、伏兎の旋耳の後にあり下るを嫌ふ

凶相の旋

一、面山の旋は血酔の旋の下に有り足を見入りて後足あからす悪敷馬といへり

一、見上の旋は目の上に有り汗目の内へ入て眼を昏す負眼の旋又は目圍の旋とも云ふ

一、眼水の旋は眼の下に在り或は涙痕の旋滴泪の旋涙の旋とも云ふ負難にて患旋す

一、被門の旋は目尻に有り物を見て奔狂するの心あり

一、頸中の旋は平管の上に有り大に悪し尋常にも好ましからす

- 一、退原たいげんの旋は百會の下に有り山賊海賊に出逢ふ力戰の相と云ふ
- 一、矢負やせいの旋は八百會にあり軍門に利を失ひ凡て勝負に悪し
- 一、戰門せんもんの旋は尾口の上に有り跡に心ありてけるなり
- 一、尾縣びけんの旋は尾口の兩脇に有り又雙門の辻ともいふ道端の虫嫌ふ毒虫によりて卒病を發すと云ふ
- 一、尾上びやうの旋は尾骨の上にあり尾辻とも云ふ、卒倒の馬とす
- 一、七走ひちそうの旋は尻股に有り旅にて落馬の相とす後喪門の旋といふ
- 一、死門しもんの旋は七走の下中ふしの上に有り疼痛にて死し或は主を見すと云ひて嫌ふ
- 一、氣余死きよしの旋は後中ふしに有り罪死の相とす
- 一、足脇あしわきの旋は後の中ふしの下内にあり沼堀に入る事あり或は林中に驅入て悪し
- 一、芝門しばひきの旋は脾腹に有りしげく痛むなり、病氣する事多し虫氣なり
- 一、小門しょうもんの旋は脾腹と胸との間に有り行路安し然も船に乗を嫌ふ水の中に飛入事あり故に悪相なり

- 一、弓箭の旋は小門の旋の上鑑の下に有り戰場にて大に悪し狂動して主人を害すと云へり
- 一、敵口の旋は前の足の根に有り火難來ると云ひて嫌ふなり
- 一、浪門の旋は渡分に有り同士討の相といへり
- 一、鬼門の旋は兩胸の門の下にあり所願何事も成就せず又嫡子を失ふとて大惡なり
- 一、喪内の旋は兩胸の内に有り嫡子を見立る事なし雙門の旋とも云ふ
- 一、勢内の旋は喪門の上にあるにあり心動きて用馬に惡し
- 一、前塞の旋は勢門の旋の上に有り軍戰の行路旅等一切惡し鎖喉の旋是なり

馬匹の中毒

馬匹を取扱ふの國民は彼が如何なる場合に中毒にかゝりて其生命を失ふか、或は疾病を來すをかを知らざる可らず

抑も動物の本能として世に生れ出てしより直に自己の榮養品として食するもの、毒

草なるか非毒草なるか或は毒物なるか毒物ならざるかを鑑別すべきものなるに係らず、是等の動物を家畜として飼養するに至て遂に其本能たる鑑識力を失ふに依り彼か有毒物を喰ひて其中毒の爲めに斃る、事少なからざるに至る、されば馬匹を飼養する者はこゝに充分の注意を拂はざるべからざるなり

獨人「ドクトル、フレーネル」氏著家畜毒物學中記載せる馬匹に關する大要の意義を掲げて讀者に紹介せんとす、全氏は中毒一般の原因を左の如く論せり

中毒一般の原因

中毒の原因に種々ありと雖其主要なるものを擧ぐれば次の如し

- 一、有毒植物 或は元來有毒ならざるも或事情の下に毒性を發生するもの
- 二、腐敗したる飼料
- 三、種々なる工業製造所附近に生ずる中毒
- 四、投藥の過失による中毒
- 五、獸醫調劑手、俗人及御者か誤解より來る處方箋或は類似名を誤る、假令は昇朶と

甘汞とを誤解し硫化加里を硫酸加里と誤解する如き事より來る中毒
 六、家鼠、南京鼠、蛾、床虫等を驅除する毒物より來る中毒
 七、色素毒

八、有毒動物の咬傷及刺傷による中毒（下略）

「フレイネル」氏が中毒の研究以上の如く詳細なる部分に亘りたりと雖世人が一般にかゝる緻密なる研究を爲すの必要尠なからん、故に予は最も必要なりと思考する有毒植物及若干の有毒礦物につき記載せんとす

有毒植物

罌粟中毒 性状 穀田及苜蓿畑に於て雜草として成長し五月より八月迄花を戴く花は大なる猩紅色の四瓣より成り花室に近き所に於て黒色を顯はす、此一年草は一米突の高さに迄發育し、鹿なる有毛の幹と汚穢綠色羽毛狀にして幹と離れたる葉と秃けたる倒置卵圓形にして八乃至十二條の截痕とを有する殼とを有す、之れに反して庭園に培養せる罌粟は六月より八月迄開花し白色或は赤色にして紫色の花臺を有する著さ

大なる花と秃けたる灰綠色の大なる幹と細き有毛の花莖と、青綠色無毛にして上方に幹を纏ふ所の葉と花に球形若くは卵圓形六仙米大の殼とを有す此殼は七乃至十五條の截痕を顯はす

有毒成分、罌粟は開花の候及び結果の始めに於て、尤も多くの毒性を有すれども、開花の前或は果實の成熟後は毒性少なさに依り飼料となすも害を見出さず

雞豆中毒 性状、雞豆は蝴蝶形科に屬する一年豆莢草にして赤色有莖の花と二筒宛の實子を納めたる莢と不對有毛の葉十三乃至十七枚と卵圓形鋸齒縁の小葉とを有す、實は圓くして突起を有し大さ豌豆大に達し形ち牡羊頭に似たり實を鏡檢すれば塞柵狀に並列したる細胞を見るを特性とす

有毒成分詳ならず

水芹菜「どくせり」中毒 性状 水芹菜は水草にして白色乳汁を有する横走根と直立一米突の高さに達する幹と三段に翼狀をなす葉と狭き尖りたる鋸齒狀の小葉と白色なる繖形花とを有す其味全く早芹菜の如し

有毒成分、水芹菜は「チクトキシシン」を含有す、此毒菜は半流動體にして壓ふべき味を有し頗る猛毒なり生根は其〇、二%乾根は三、五%を含有す

園芹中毒、性状 此植物は庭園、畑地、塵埃蓄積場及路傍に發生する繖形科植物の一種にして白色の繖形花と圓形滑澤にして一米突の高さに達し青色の大なる斑點を有する幹と二段乃至四段の翼狀に別れ下面は光輝を放ち殆んど臭氣無きも手中に摩擦すれば大蒜様の臭氣を放つ葉と、半圓筒狀の葉莖と大なる三葉の花套と併に厚くして尖角ある果莖とを備ふ有毒成分詳ならず

水仙花中毒 性状 水仙花は庭園に培養する所のものにして黄色或は白色の花を有する草或は其球根を喰て中毒することあり

馬酔木中毒、性状 石南科植物に屬する馬酔木に數種ありて野生のものと庭園に栽培するものとありて家畜を中毒す、此植物は小形常緑の灌木にして楕圓形或は長「ランセット」狀の葉と紫赤色或は微薔紅色、漏斗形、犀形房狀の花を有す、葉は滑かに下面は密に鱗狀片を有す

其種類によりて惡臭と刺激性の味ある葉を有す、

有毒成分 馬酔木は「アンドロメドキシシン」を有する外に石南科と同じく諸種の毒素を含有す

「アンドロメドキシシン」は強き作用を有する處の物質にして皮膚及粘膜炎を發せしめ神經中樞を麻痺しむる最も恐るべきものなり、馬酔木は漢名「檜木」にして古より人のよく知れる處なり和名にて「アセミ」「アセボ」など稱せらるこの木の花も葉も實も凡て有毒なるものなりされは古人も次の如く詠じ出せり

とりつなけ玉田横野のはなれ駒

「つゝじ」「あせみ」の花やさくらん

或は

忘れもて駒なつなけそみちのくの

つゝしか岡に「あせみ」はなさく

蕎麥中毒

性状 此植物は頂端に繖形花を戴し一年草にして光輝ある灰色或は

褐色大理石様の五六、密米大の實を結ふ而して此植物の馬匹を中毒せしむるは特に其
綠草を開花の候刈り取りて與ふるによる或は糟穀枝幹及子實等により發病する事も
あり

有毒成分 中毒の原因は其本分にあらずして之に寄生する菌芽なりと云ふ

麻中毒 性狀 麻は一年草にして高さ一米突に達する無毛の「ランセット」狀小
脈莖二仙米突半の長さある葉と蒼白天色の綴形花とを有す實子は卵圓形扁平にして鋭
き縁を有し長さ半仙米に達し褐色光輝ある薄殼並に綠色の核を有す

有毒成分 此款は六%粘液を含有し實は三〇%油質と二五%の自質とを含有す而し
て配糖質性の「リニン」を含有するを以て有毒なり「リニン」は開花の候尤も多く
存在するなり

黃揚木中毒、性狀 葉は極めて特異にして革様常綠上面輝き下面鮮かに長卵圓
形にして短かさ莖を有し末端鈍し上面には多數の縱走纖維と之れより發生するも無數
の小なる側纖維とありて容易に上面と下面とを區別せしむ

有毒成分 この葉は「ブクシン」と稱する有毒成分を含む

水松中毒、此植物は灌木として或は唐木として十米突の高さに迄成長す其常綠
たる事も上方暗綠色下方鮮綠色長くして廣く尖端を有する纖維と赤褐色の枝と猩紅色
の花と紫色の實は能く人に知らる

有毒成分 水松の葉は刺激毒たる蟻酸と麻酔毒たる「タキシシ」とを含有す、凡て
の家畜は之れが爲めに中毒す

以上列記したる外、尙數多の有毒植物あり、到底枚舉に遑あらずと雖、前記の如何
にも外國的に記述せられたる恨を削らんが爲め、左に和名によりて記載せられる有毒
植物を掲げ、以て其缺を補はんとなす、然りと雖もとより専門家ならぬ吾人が研究は、
或は同種を重複せられたるやの嫌あらんも記して以て諸賢の教を仰がんとす
次に記せる有毒植物は馬匹が是を喰むも忽ちに其毒性に依て中毒さるゝに限らずし
て、馬匹に食せしむるを好まぬ少量の有毒植物もあはせ列記したるなり

はんげつつじ「ウマツツシ」

莖五六尺に達し葉は倒長卵形又は倒披針形にして纖毛狀鋸齒を有す、花は大形に
まて黄色又は黄赤色を呈し、極めて短かき總狀花序に排列す
どくろうつき (木本黄精葉)

毒空木科

山野に自生する灌木にして高さ五六尺稍蔓性の莖を開生す、葉は對生にして枝の
最下葉は稍圓形をなし、上葉は卵狀披針形をなし先端尖銳平滑にして三肋を有す、
花は總狀をなし雌雄異株なり、果實は豆大にして熟すれば紅色を呈す、劇毒を有す
るを以て誤て之を食すれば大低死にいたる

きつねのぼたん (回々蒜)

毛 蕨 科

路傍畦畔の稍濕地に多き毒草にして莖葉に毛を生ず一二尺の高さに至り、葉は三
全裂葉にして各小葉亦二三裂す、花は黄色にして「キンバウゲ」より稍小なり倒卵
形をなせる花瓣の内面基部に小鱗片を有す果實は多數集りて金平糖狀をなす、四月
より九月にかけて花あり

たからし (石龍苗)

毛 蕨 科

水田又は濕地に生ずる平滑草木にして莖は太く分裂し光澤を有す、花は黄色にし
て殆んど「キツネノボタン」等に類すれども、稍小さし果實は又集りて俵狀をなす
有毒植物なり

やいとはな

茜 草 科

藪叢のあたりに多き蔓性草にして一種の惡臭を有す、葉は對生し春日葉腋に花を
生す其色灰色を呈し内面紫色を帯び壺狀をなせり

やつて (金剛纂)

五 加 料

主として暖國に多く生る灌木にして幹の高さ七八尺一根より叢生す、葉は長柄に
して掌狀に分裂し頗る大きく厚く光澤に富めり冬月枝梢葉心に花莖をぬき、分岐し
て淡黄色の小花を球狀に開く後圓實を結ぶ熟して黑色なり

はしりところ (葭宕)

蒺 藜 科

山地の幽谷に生する有毒草にして若し誤て之を食すれば狂氣して奔走するを以て
「ハシリドコロ」の稱あり、早春宿根より雪を侵して紫黑色の莖を抽き、長して莖淡

綠色に變ず、莖高一尺餘「ヤマゴボウ」に似て小なる葉を互生し葉腋の長柄に一花を垂る、其色帶紫黃褐色を呈す

まるはのほろし(マルハノホロシ)

茄 科

山地にある蔓性の草にして概形「ヒョドリジャウゴ」に稍似て小さく葉は彼の如く缺刻を有せずして、梅の葉に似て毛なく平滑なり夏秋の際紫色の小花を總狀に開き白紅色の實を結ぶ

ひととりじやうご(ホロシ)

茄 科

山野に在る草本狀權木にして春日舊蔓より新しき板葉を生し好みて他の草木の纏繞す葉は概ね「ヒルカホ」に似て三裂し心臟狀の基脚を有す花軸を出し多く分叉して白色の花を開く花後漿果を結び秋月仕熟して南天子の如し

くさぎ

馬鞭草科

山野に自生する落葉權木にして葉は廣卵形をなし、先端尖り短毛を有し、且長柄ありて對生す、聚繖花序は八月頃枝の上部に位し散在せる花より成り、花冠は白色

にして紅色を帶ふ此植物は其葉に惡臭あれと其花に至りては頗る芳香を具ふ果は碧色なり

ねちき

石 南 科

山林に生ずる喬木にして葉は卵圓形をなし互生す、裏面の脈上に毛茸多し五六月頃新枝梢に二三寸の穗狀花を下垂す、鐘狀形にして五尖、此木は大木なるに至れば其幹縲れを以て此名稱ありと

くらゝ(クサエンジュ)「苦參」

萱 科

山野に多き草木にして莖四五尺羽狀復葉を互生す六月頃梢上に淡黄色の總狀葉序を出す、穗の長さ大なるものは七八寸に及び花後細長さ莢を結ぶ

いちりんさう(イチゲサウ)「雙瓶梅」

毛 茛 科

山林の稍陰地に生ずる七八寸の草にして根葉は二回三出復葉をなし、總苞の葉は三個にして各深く分裂す、四日頃總苞の中心に三寸ばかりの一花柄をぬき卵圓形五瓣の白色花一個を開く

せんいちさう

毛 茸 科

路傍原野に多き蔓草にして秋日既に生じ春より夏にかけて繁茂す葉は疎らなる奇
数羽状複葉にして三個乃至七個の小葉を有す

秋日白花を多數開き花後瘦果の附屬物は長さ一寸に達し白色毛を有す、

次に其名稱のみを記載せは

- △はへとくさう (長鞭草科) △いけま (蘿藦科) △ふちうつき (馬錢科) △おにしげり (瑞香科) △まつまふ
- ぢ (全) △つなぞ (田麻科) △つりふれさう (鳳仙花科) △にしきや (衛矛科) △まゆみ (衛矛科) △つたうる
- し (漆科) △うるし (全科) △とをだいくさ (大戟科) △なつとうだい (全) △たかとうだい (全) △のうる
- し (全) △やまあね (全) △ほるとさう (全) △たうごま (全) あぶらさう (大戟科) △こくさぎ (芸香科)
- △みやましきみ (全) くさのわう (罌粟科) △きけまん (全) △たけにくさ (全) △ぼたんづる (毛茛科) う
- まのあしがた (全) △ひめうづ (全) △れいじんさう (全) △はんしやうづる (毛茛科) △こきんぼうげ (全)
- △いとまんぼうげ (全) △とりかぶと (全) △しきみ (木蘭科) △やまごぼう (商陸科) △いらくさ (荨麻科)
- △のぐるみ (胡排科) どくだみ (三白草科) △ひかんばな (石蒜科) △きつれのかみそり (石蒜科) △はいけ
- いさう (石合科) △しゆるさう (全) △つくはれさう (全) △なべわり (石蒜科) △うらしまさう (天南星科)
- △まむしぐさ (天南星科) △てんなんしやう (全) ゆきもちさう (全) △かいる (全) △みつげさう (天南草
- 科) △いしむ (全) △さしおもがた (澤瀉科)

有毒礦物中毒、馬匹か礦物毒によりて中毒さるゝ場合は極めて稀れなりと雖尙ほ

飼主の不注意よりして往々彼の中毒さるゝあり左に其起り得べき不注意を列舉して聊
か参考に供せんとす

燐中鉛、 通例燐化鉛、糊泥、或は燐丸として家鼠などを退治せんとして住家厩舎
附近に置き偶然これに觸れたる秣藁等を馬匹の喰するによりて中毒され或は燐「マツ
チ」の藁或は秣中に混したるを喰むによりて原因するなり

鉛及亞鉛中毒、 射的場近傍にて馬に草飼ふ時は流弾の落下せるか或は破片の叢中
に埋りあるを偶然混して喰するより起因し或は鐵管及亞鉛製の飼槽等より其毒を體內
に水と共に入るゝ事あり

銅の中毒、 馬匹に飼與する小麥粉中に硫酸銅の混する事あり
以上の外有毒礦物の數極めて多しと雖體內に浸入する事稀なり彼の淺瀬に於て水飼ふ
時は幾多の有毒礦物を含有せる砂は水と共に體內に入るの恐ありされば充分注意して
淺瀬に水飼ふべく決して馬の鼻先迄水中に入れて飲ましむ可らず此の如きは益々混濁
して砂と共に有毒礦物の體內に注入せらるゝに至るべし

馬匹の構造上他動物と異りたる點

馬匹の構造か他動物と其の趣を異にせる特殊の點を研究するは、極めて趣味を有する事なりと信ず、依りて唯予の研究せる事項を茲に掲げ以て諸賢の教を乞はんとす、
題中「馬匹の構造上……」とあるも、記載の事項中外貌にわたれる點あり、讀者是を諒せよ、

馬の耳

彼の李白が詩に

世人聞之皆掉頭 有如東風射馬耳

と詠し出せる以來、馬の耳は極めて粗漏にして、語れど其効なきか如き感念を吾人に與へたれども、馬の耳は全く然らず、頗る能く發達し優に他動物より秀てたるものあり、即ち一度ひ騎乘して山野を行かんか、騎せる人の未だ知らざる以前、伴ふ犬の未だ悟らざる以前に於て、彼は克く其耳を聳たて、外來者の音を聞き、或は嘶て同種族の近寄り來れるを知らしむ、故に騎者は其始め何か故に馬の耳を聳てたるかを知らず、

又何の故に嘶きたるかを察せざりしと雖、後に至りて彼が耳聳て或は嘶きたる原因は以上の理由に因せる所以を知るに至り、如何に馬の聽官か他動物に比較して秀てたるかを知るに足らん、而して又彼が音響を聞かんが爲め、其耳を諸の方向に轉ずる事も亦甚だ敏活にして此部の運動筋は、最もよく發達したるものなり

馬の齒と銜受け

馬の齒は上下合して四十枚（牝馬は三十六枚）あり、即ち次の如く分類す

切齒 十二枚 犬齒 四枚 臼齒 二十四枚

但し牝馬は犬齒を欠くを通常とす

以上の如き多數の齒を有するは、他動物に多く其例を見ざるなり、加之彼が齒面の糜滅誠に規則正しきは、彼の特異とする所なるべく、吾人は之を應用して、馬の年齢鑑定の唯一の據點となす、而て又彼犬齒の后方（牝馬は切齒后方）より臼に至るの間は、特に間隔多きを見る、世人これを銜受けと名づく、是即ち銜を受くるに極めて好都合なる如く出來たればなり、こは自然か銜を受けしむる爲め造りしものなるか、將

又此状態を吾人が利用して、衝なるものを造りしが、何れにせよ乗用動物として好都合にして彼が獨特の構造なりとす、然り而して又彼口裂の后方即ち口角が、之に伴ふて其間所に接して終るは、兩者相對して衝を裝するに適し、益々其不思議なる構造に驚かざるを得ず

馬の四肢と附蟬

敏捷なる運動を營む彼馬は、其四肢に於て著しき發達をなせり、其細長にして各關節の大なる、鮮明にして堅牢なる腿を具へたる、單形にして堅硬なる彼の蹄を有せる予は此の如き運動的に構成せられたる他の動物を知らざるなり、而かも其飛節の巧妙なる、其角度の良好なる、實に造化の不可思議なるを思はずんばあらず

又彼が肢に附着せる附蟬なるものあり、角質にして其形一樣ならずと雖、其甚敷く大なるを認めず、而かも其附蟬か多くは彼が肢の内面に附着せるは、益々不思議にして、自然は何が爲めにかくの如きものを造り出せしか、或は殘留しをけるかをあやしむ、思ふに是動物進化上の遺物ならんか、而してこの附蟬なるものが、又馬匹獨特の

專有物ならんとは、いよゝ不可思議のことならずや。

馬の胃と腸

馬の胃は其體軀に比較して甚小に之に反して其腸は大なり、何故に彼馬の胃が如此く小にして腸の大なるまた如此きかを研究するは一大趣味を有する事とす彼が敏捷活潑なる運動性の運動なる事は前述の如くにして、彼馬の胃が小にして腸の大なるは是全く運動の輕快を求めんが爲に外ならず、何となれば彼の胃は小なるを以て一時に多量の食物を喰む事能はず、回数を分ちて漸々に食物を喰まざるを得ず、従て彼が胃は常に甚敷き重量を有せずして、常に運動を要求し得るなり、若し牛の如き大なる胃腑を彼が腹腔に藏するならんには、彼に向て到底隨時輕快なる運動を要求する事能はざるなり、故に彼が飼料を毎日數回に分ちて與ふると共に比較的濃厚なる食物を要する所以なり、而して彼は胃の不足を補はんが爲めに其腸は比較的大にしてよく消化の作用をなし、而かも彼が運動に尠少の不如意あるなし、蓋し馬は自然が如何にも運動的動物として構成したるものにして其注意の周到なる唯驚くの外なきなり。

以上記載せるの外彼馬の心臓及肺臓も、運動的に構成せられ、快速の歩度を要求し得べく、加之彼の皮膚は薄くして良く緊張し、皮下脂肪の蓄積少なく神経、血管は淺在し之に感するや鋭敏なり、故に彼馬は全く運動的動物にして、他動物に比して頗る活氣を備ふるものと云ふを得べし。

馬の鬣毛と頭骨

頸上に鬣毛を具備するは、彼馬の特有なるべく、彼が昆虫類に對して、頸部の保護器となせるを、吾人は利用して騎乘に便ず、加之彼が鬣脚は高くして、人貨を載するに適す、馬の構造も亦奇なるかな、便なるかな、顔の長さ人を馬面ウマオモと稱す、實にや馬の頭骨は、比較的長さを以てなり、予は彼の如き長さ頭骨を有する動物を他に見出す能はず。

馬の起き様

彼が性のしかく活潑敏捷なる所以は、讀者の業わざに既に充分認知する處ならん、されば予はこゝに其活潑なる馬の起き方を掲げて一笑を促さんとす、

ぬさめの床のゆかしさ、心地よさは吾も人も同じからん、殊に冬の日に空吹く風の寒けさを感ずるにつけても、彼あたゝかき己が寢床を立ちはなるは、實に惜しき心地すなり、されば意物が朝寢の床を驚かさなか、なか／＼に起き上り得ずして、先づ體の三分一丈け起き上りて、しばらくあたりをながめさて目をこすり、鼻のあたりをかき、耳をいろひて後、漸く體の二分一を起き上がり又一思索して肌着を着し、あくび二つ三つすませさ、さて腰をあげ、やうやく足立つるなり、されば起きよの知らせを得て後約五分ばかりも費すなり、かくの如く數段に切りて起上るを俗に牛起と云ふとかや、而して彼の天性活潑なる馬が起き上るや、常に一舉にして決して一肢あしつゝ起き上るものに非ず、必ずや一時に飛びて起き上るなりされば此の如きを俗に馬起うまおこと稱ふ、吾人は冬の朝あしたの寒さの床は、この馬起こそ望ましけれ、

馬は嘔吐せず

彼馬の胃は、其噴門（入口）に於ける括約筋の特異に能く發育せるを以て、彼は尋常の場合に於ては、決して嘔吐する事なしと、即ち彼が萬一嘔吐をなしたらんには、是

尋常の状態に非ずして、必ずや病勢の然らしむる事を豫知し置かざる可からず。

馬は口より呼吸せず

馬は消化及呼吸管の交叉部なる、咽頭に位せる軟口蓋の構造上、口腔に於て呼吸する事能はず、止なく鼻腔のみを以て呼吸を營むなり、彼の犬猫の如きは、息せく時に口を開き、舌を出して多量の空気を呼吸せんとすれども、馬は然らず、何程急速の運動をなして、呼吸の切迫すればとて、決して彼は口腔に於て呼吸する事能はざるなり、故にかくの如き場合には、彼は口を益々かたく締め鼻のみ大にして、空気の多量を呼吸せんと勉むるは又不可思議なる馬の構造ならずや、

馬匹と宗教

彼の「マホメット」が宗教に馬を引入れ、人と馬との間に分つ可らざる關係を生ぜしめたるが如きは、有名なる事實なりと雖、我國に於ては左程にもあらぬが如し、されど神教と佛教とを問はず、馬匹が信仰の一部となれるは、世人の疑なき處ならん、即ち

神教に神馬あり、繪馬あり、佛教に馬頭觀音あるが如し、而かも皆是現世に存じ、尙これを奉供し是を信仰し、あり、然れども吾人は何が故に馬匹が日本古來の宗教に關係を生ぜしめたるかを知らず、又何時の頃より其信仰を始めたかを知らず、故に斯の種の深き研究は他日に譲りて、茲に宗教に關したる馬匹の例證若干を記述し以て、過去の馬匹と宗教の端一を示し、古來馬匹に對する宗教上の祭典とも云ふべきもの一、三を附記せんとす。

馬頭觀世音

馬頭觀世音は、古來より禽獸社會一般の生命を保護主宰する處の鬼神なりと云ひ傳ふ、されど何時の頃より始りたるかと詳にする能はずと雖、我國にては佛教傳來の當時、既に信仰されたるもの、如し、而して此神はもと馬にして、馬は皆は皆此神の化身なりと云ふ、即ち大坪流馬書に在の如く記せり

瀆項曰凡馬者乘人而成通路馬頭觀音之化身也焉斯爲疎矣以斯具有有手綱有轡所謂轡者不動明王手綱者辨才尊天也難有爲比變妙身云云凡手綱引者上求菩提也亦離動者下化

衆生也故爲有汚之身不可等閑、

世人これを信仰する時は利益多くして農民等は愛馬飼牛の病災を免れん事を願ふと云ふ、毎年一、五、九、の三日に吉日を卜し、祭典を擧ぐ、而して陰曆正月十九日を以て、觀音の大祭日となすと云ふ、

現世は路傍この觀音の石碑を見る事あるも其盛大なる祭あるを多く聞かず、然れども往古は甚だ隆盛を極めたる時代もありたりと見へ、此觀音の建物なりとて汚ちかりたる寺もあれど今は住職もなく荒れ果てたる姿のみぞ多かる、又古はゆかり多き駿馬の斃れたる時は、馬頭觀音と崇め祀りて碑文さへ建設せるものあり、

今茲に兎園小説に記載せる、駿馬一瞬の碑文を記せば左の如し。

駿馬一瞬碑文、

良馬世多有、然傳焉者無幾何也非_レ遇_レ良主_ニ知其能_ニ不_レ得其力_ニ而盡其用、主亦有爲之輝揚感惠於一代、關侯赤兔翼意王追是也、若能傳_レ後長存者、在辭以文之、漢武蒲稍以樂府、楚項烏騶依_レ悲歌、
享和元年五月初九、松前考侯愛馬一瞬、病死_ニ于槽檻_ニ、俟雅善騎、無_レ駿稱_レ意、聞_ニ薩摩國出_ニ良馬_ニ、求_ニ之薩摩重秀公_ニ辭云、吾不敢欲若少年輩所_レ愛、鬃毛如油、蹄項如股、步驟協聲律、馳驅合曲度、唯神速若_ニ掣電流星_ニ、則是矣、至旋毛吉凶、尾鬣疎密、毛色麗黃皆非所_レ拘論云、公壯之贈封內喜入野所出駿馬一瞬是也、仁論眼如_レ鈴、蹄如_レ鐵形

享和元年辛酉夏五月

北山信有撰

神 馬

古來神社に神馬の像あり、其色多くは白毛にして、自_ニから威風あり、その何時の頃より彼の設けられしやは詳ならねど、案するに昔は眞の馬を神社に奉納したるならん即ち天馬、良馬など云ふ一入秀てたる馬をば、神前に供へ、以て幸福と武運とを祈りたるが如く、或は神なる人の未だ世にある時に乗用せし愛馬をば、其人の死と共に神社に牽入れたるより始まれるにあらずやと思ふ節あり、よしそは何れにせよ彼生ける馬を神社に供するを常としけるを、身貧窶にして馬を奉納する事叶はぬ人は、其馬の代りとして、彼の繪を畫きて額面に仕立て、神前に奉りしより一般に繪馬として世に行はるゝに至りたるなる可し。

遮莫予は此繪馬につき、聊か記する處あらんとす、

繪 馬

馬を繪にかきし事も何時の頃より始ましか定がならねど牧畜雜誌に左の一節あり、
參考に資す可し。

仁徳天皇高台に登り給ひ人煙の稀なるを見給ひ民力の衰へたるに震襟を惱まし給ひ大に興農に志して御料馬を大和の國なる某農に下賜ひ其驥馬の形を始めて繪馬に摸寫したり

されどこの繪馬を果して神に奉りしより繪馬なるもの、始まりしや否やは未だ詳ならず、

獸醫學士佐藤悠次郎氏が牧畜雜誌に記載せる崎玉縣地方社寺に對する繪馬の來歴を記せば次の如し、

繪馬とは五、六寸平方の板面に勇壯活潑にして馬族中類例を見ざる處の異狀の馬形を畫き諸種の毛色を彩して之を組合せ毎年一回本堂に集合するを例となす、(本堂は馬頭觀音堂なり)來歴は賣店に至り其自ら飼使する處の馬匹と同色のものを撰び生馬を賣買すると等しき手續に擬し取引を行ふ即ち馬喰と農民との間に生馬を賣買するに

等しきものとす故に一定の價なく需用者の嗜好に應じて差異ありとす而して賣買の相談整理すれば酒肴を調へて之を祝し(中略)之を佛前に供へ祈禱を乞ふ其式終る時は之を自家の入口若くは厩舎の入口に釘付して癘難惡疫の防鎮御守となす、

以上の記述による時は、繪馬は神社に供するに非ずして、自己の馬匹の安全を祈る爲めなるが如し、要するに馬頭觀音と云ひ神馬と云ひ、或はこの繪馬と云ひ、皆是れ馬に關したる宗教上の出來來にして馬匹が宗教と關係を有する事は疑なきなり、吾人は迷信的宗教の布及を望まざるも、彼の人類に對して忠實なる馬匹が最後、而かも國家の爲めに斃れたる勇敢なる馬匹の爲めに、是れを啓しこの忠魂を吊するの、實に必要なるを感ずるものなり、終りに望みて、この馬匹に關する祀祭の一二を掲記す可し。

厩祭之事

大坪本流

厩祭は春秋雨度吉辰を撰び、物忌して保食神を祭るべし、眞之厩に荒蕪を敷き、大釜の蓋を庭の中に据へ、白和幣を立て燈明を左右に立て供物を上る、其後猿を率て酒肴を設て賀するなり、

馬場祭之事

馬場祭も保馬神を祭る也、生竹を長さ一尺二寸に切て牧大明神と書て、兩方の隅に
立るなり、さて馬を引出し、明の方へ向乗といなや、六合稜の策を打て、牧大明神、
大己貴尊、田八幡鹿鳥と神の名を口にして、人馬繁昌馬場長久を祈るべし

厩へ押札之事

鬼門の方押、

四勿之文

米故三界城

悟故十方空

本來無東西

何處有南北

厩の口に押

惡魔消散文

天聲是心光明宿人菩薩化皆來惠城

猿登左柱に押

馬吟足音文

一切有爲法如夢幼泡影如露亦如電應作如是觀馳足音

猿登左柱に押

老猿文

他現々在乗説馬頭乘馬一天寶霧切姜縛買、

猿走横木に押

壽命長遠文

具一切功德慈眼視衆生福壽海無量是故應頂禮、

右の札を書時一字に三讀して馬頭觀世音と唱て書なりと。

英雄と馬匹

戀しくは來ても見よかし身に添ふる

鹿毛をはいかで放ちやるべき

と源仲綱が愛馬木戸鹿毛を思ふの情切々として克くも詠ひ出されたるもの哉、實に

や古來武夫の戰場に偉功を奏し、花よ櫻よ武門の譽よと賞へられたる、大方はこれ彼の馬匹の力によれることを嬉しけれ、

されば英傑は力を盡して駿馬を得ん事を謀り騎馬も亦彼英勇の力によりて、益々其本能を發揮する事を得たり、彼源滿政か愛馬「赤六」に於ける、安部貞任か「大黒」に於ける、清原家衝か「花柑子」に於ける、藤原國衡「高館黒」に於けるさては、義經が「大鹿毛」平知盛か「井上黒」、熊谷直實が「權太栗毛」其子直家が「白波」あるは宇治川の先登に花々しき名譽を博し得たる「生腰」「摺墨」に於けるなど以ていかに英傑に附隨して美名を萬代に残せるかを證するに足る可し、

然り而して此等の英傑は已か愛馬を至重の活武器として最も注意深く飼育し終始身邊を放さず、果ては戰場の露と消ゆるの最後迄其所を同じくす英傑と馬匹の關係何ぞ夫れ此くの如く深縁なる。

いてや左に古來の英傑が、其愛馬と最後を俱にし或は主傷きて馬斃れ、或は馬立つ能はずして其主も自害し或は馬傷きて衰れ捨て難くこれをいたはりて我が身に背負ひ

流れを渡り山を越えたる勇士又は己が身の迎も世に生きながらふへくもあらぬを知りて、愛馬を敵陣に放ちやりせめては新に主とりし、我が武名をも輝せよと、泣て袂を別ちたる事蹟、または妻子訣別の場に、涙一滴を落さざりし豪傑が、愛馬に不覺の涙を拂ふ武夫の情、いかに清く美しさを寫し見んか、

彼源家の武將義仲が最後は、世人の知れる如く誠に哀れなるものなりき、武運つきたる彼か臣兼平に再三諫められて後、漸くに彼方の林をさして急ぐ時しもあれ天なる哉命なる哉彼の愛馬は泥中に陥入りて又立つべくもあらず、進退茲に谷まりて、あせりにあせる英雄が心情、實に哀れの極みと云ふべく、果ては義仲が兼平戀しと、後振り向さし一刹那、流失は彼の面を射、馬はあへぎ主は傷き、共に苦み俱に倒るるに至る、嗚呼思へは昨日迄、春風てふ名馬に跨りて、御側に侍りける女傑巴のこのことを聞きて如何に涙を絞りけん。

かくて義仲は彼が愛馬の馬上に於て遂に哀れの最後を遂げたるなりき。又彼戰場に於て愛馬權太栗毛にうち跨れる直實、駿馬白波にうち乗れる其子直家が

奮闘の状はまことに目覚しきものなりしか、武運拙く權太栗毛の太股に射通されし傷重く、勇者も遂に馬より落下して、群がる敵にうち圍まれ力つきて子直家をはげましつゝ、花々しき最後の奮闘を続け、愛馬諸共枯骨を戦場にさらせしこそ悲哀の極みなれ、

さては彼新田義貞か名馬五尺三寸と云ふ水諫栗毛なる逸物に打ち乗りての最後は、これも亦世人の早く知る所にして、戦破れて味方を失ひ、義貞か傍には唯一人の射手だになく、藤内庄衛門か諫も聞かばこそ「失士獨免」は我意にあらずと、健男氣の一言を残して敵中に懸入らんと、彼の愛馬に一鞭あてつれば、あはれ五筋まで射立てられたる矢に力盡き小溝一つをさえこえかねて、屏風の如くたをれ、岸の下に轉び伏し、弓手の足を馬の下にしかれ、起きかねたる時しもあれ、彼の白羽の矢一筋のため眉間の眞只中を射抜かれ、遂に悲慘の最後を遂げぬ—あはれ大君の一入力となし給ひける義貞は、遂に我愛馬の下に足ひかれて、その大馬と共に戦場の露と消えはたたり、

此他幾多の英勇傑士か、其愛馬と最後に共にせる事蹟は甚だ多けれども今是を詳記せんも其趣味少なからん故に是を削きて其種の異なるものを記さんと欲す、

源軍の武將畠山重忠が戦場に於ける愛馬の擁護こそ面白けれ、彼宇治川の戦に、何れも先陣せんとあせりにあせる内、別けて佐々木四郎高綱と梶原景季が魁して末代迄の譽と仰かれつるは、世に隠なき美談なるか、重忠も此日亦水中に馬乗り入れて進みしが、平家の鹿鳥與市かはなつ矢は重忠の愛馬か襟髪を射通され、流石の逸物も此矢に弱り、悶へ苦み跳ね出すを重忠少しも騒かず、静かに馬より下り、彼の前肢を執り己が肩にかつぎ、大力にまかせて水中を徐ろに進み行きしが、水肩を越す程なれば、浮つ沈みつして遂に彼の岸に着きたりとぞ、傷ける愛馬をたすけて我身の苦みを忘るゝ重忠が心、實にやさしき武夫ならずや。

又彼有名なる一の谷の戦に、義經始め皆愛馬に打乗りて、逆落しに突入りたる、彼の絶壁懸岸を重忠は日頃我馬の力になれば、今日こそは其代りせんものと、三日月と云ふ栗毛の馬を、十文字に引緘けて、鎧の上に掻負ひ、椎の素立一本捻切て杖に突き、岩

間を傳へて落しけると云ふ、吁重忠の心情唯感服の外なかるべし。
 平家の武將知盛か、名馬井上黒につき源平盛衰記は左の如く語り傳へたり、曰く知盛戰破れて海上三町計り游かせ味方の船に來りしが井上黒を立つべき處なきゆえ船の舳より馬の頭を磯に向て一鞭當てければ此馬渚を差て游き歸る是を見て阿波矢夫部太成良此馬渚にかへるならば敵の者と成るべし射殺し申さんと弓に矢を番いけるを知盛暫しと押し止め、情なし成良只今我等十死を逃れて此處に來りしは全く此馬の力なり我命を助けたる恩ある馬を情なく射殺すべきや、只捨て置て助けよと下知せられ、井上黒は渚に游き歸りしが主なりける知盛に名残や惜みけん船の方を振向て、三度嘶きけるとは畜類とは云へ哀れなり、后義經此馬を分捕して院の御所へ獻せられしと云ふ云々成良が匹夫の心、知盛か尙き心、其愛馬を思ふの眞情試に掬すべく、井上黒なる馬亦も良主を持ちたるものかな、

終りにのぞみ彼明智左馬介か單騎琵琶の湖水を渡り、其愛馬大鹿毛と別をなす一場の悲劇は琵琶歌「左馬介湖水渡」に幾多の男子を泣かしめたるもの、こゝに掲げて

本項の記事を摺筆す可し、噫々英雄と馬匹多くは悲哀の種ならぬはなきこそ不思議なれ。

左馬介湖水渡

おつとはかりに乗りぬきて、一息吞みしかけ聲に。馬は忽ち飛ぶ如く、名に負ふ近江の湖に。さんぶとばかりに躍り入る、馬は天下の逸物なり。騎手はもとより古今の達者、眞一文字に乗りきる様は。神か人かと思はばかり、水や空や空や水や。眼のかきり一碧の、波を蹴立つる人鹿毛に。緋おとし着たる左馬の介、一きは目に立つ武者ぶりに。無数の名人永徳か、丹精こめて蓄きたる。輿繪の龍の陣羽織、比叡嵐に曬へし。或は緩に又急に、揚げ鞍振ふ勇ましき。馬疲るれば人助け、人つかれば馬に頼り。さしにも廣き湖も、事ともせざる不敵さに。追手の勢も氣をとられ、酔へるか如き心地して。あれよくと云ふばかり、只一筋の遠矢だに。射かけん人もなかりけり、光俊やかて唐崎の。濱のこなたにうちあかり、御物の具の水ばらい。愛馬の強なてあけて、哀別離苦の涙聲。如何に大鹿毛承はれ、光俊多年武勇の譽。半は汝の勳ぞ、斯かる名馬を光俊か。命と共に殺さんば、いとくおしき心地ぞす。天晴汝は長生へて、武勇すぐれし主をとり。修羅の巻を走せ廻り、流石は明智の馬なりと。我武名をも後の世の、武邊の語りに残せかし。やよ大鹿毛よ心得しかと、眞心こめて云ひきかせ。十王堂の柱はつなき、香の包をおし開き。やかて黒斗取り出し、天正十年六月十日。明智左馬の介光俊、この馬を以て湖水を渡しものなり。と筆太々とかきのこし、イザと計に立去れば。馬も名残をおしみてか、聲も哀れに嘶しを。見返りかちに靜々と、坂本城に引上げし、心の中や如何ならん。

哀れ枯槎の花枯れて、吾三の桐の世となれば。此大鹿毛は秀吉か、日本一の名馬ぞと。いと珍重にめされつ

一、菴主の名をも武馬さへ。花とたしへて幾千代に、朽ちぬ譽は今の世に。比良の山より猶高く、琵琶の湖琵琶の音に。と、めてかたるそ、めてたけれ。

古の馬政

我國の馬政は遠き上代の頃より既に行はれたるは疑なき事實にして、馬匹を戰場に用ゐる漸く多きに至りて、其發達も稍見るべきものあるに至れり、即ち神功皇后の攝政當時に於て、既に馬を養ふ司として、飼部なるものあり、日本書記に左の如く記す

從今以後、長與_ニ乾_ニ坤伏爲_ニ飼部_ニ其不_レ乾_ニ船_ニ掩_ニ而春秋獻_ニ馬梳及馬鞭_ニ

皇后の三韓征伐ありてより、百濟國より良馬數頭を貢するに至りて、外國種の我國に入り來り、其後前後四回同國より馬匹を貢したるのみならず、應神天皇の御代に至り、阿直岐の渡來せしより、彼をして馬の飼養保育をなさしめられしかは、馬種の改良も大に進歩したるならんと思ふ、されと惜哉戰捷の夢に酔ひて、盛なりし武道の衰うると共に、馬政も亦衰へしか如く、史上絶て其跡を見ず、次て繼體天皇、推古天皇時代より、漸く馬政の事を見るに至りしか、孝德天皇天智天皇の御世に至りては、大に馬政の

發達したるを窺ふに足れりかくて文武天皇の時代に至りては馬政大に整ひ、左右馬寮を置き、其制度頗る觀るべきものあるに至り、彼醍醐天皇延喜の式を撰定せらるゝに至り、實に完全緻密なる馬政を施かれたるか如し、されば今茲に其當時なる延喜の馬政一般を記載して古の馬政を窺はんとす。

延喜式に記載しある御牧の外、其當時より始まりたる牧名を記して、古昔牧場の盛なりしを示さんとす

延喜式にある御牧左の如し、但し()の内に同式にのらざるも、名あるものなりと思ひければ附記す、

御 牧

甲斐國	拍前牧	真衣野牧	穗坂牧
武藏國	石川牧	小川牧	由比牧
	(父生牧)	(檜前牧)	立野牧
			(小野牧)
信濃國	山鹿牧	鹽原牧	殖原牧
	大野牧	平井手牧	新張牧
			笠原牧
			萩原牧
			岡屋牧
			宮處牧

高位牧 大室牧 鹽野牧 長倉牧 霧原牧
 望月牧
 上野國 利刈牧 有馬牧 治尾牧 久野牧 市代牧
 大鹽牧 拜志牧 鹽山牧 新屋牧 (利根牧)
 以上の諸牧にして、毎年甲斐より六十四、武藏より五十四、信濃より八十四、上野より五十四を貢獻したりと云ふ、尙ほ其他諸國の牧場を記述すれば、
(大坪本流に記載せられたるものなり)
 下野國 朱門牧
 安房國 白濱牧 鈴師牧
 上總國 大野牧
 下總國 高津牧 大錯牧 長列牧 木島牧
 常陸國 信太牧
 陸奥國 安達野牧
 相摸國 岡野牧 蘇彌祭牧

伯耆國 古布牧
 周防國 竈合牧
 備前國 長島牧
 長門國 宇養牧
 伊豫國 急郡島牧
 土佐國 沼山牧
 肥前國 鹿島牧 庇羅牧 生屬牧
 肥後國 二重牧 波良牧
 日向國 野波野牧 都濃野牧 提野牧

尙ほ大坪本流に記載せる當時の牧馬の規定を寫しとれば次の如し。

牧者畜園也牧毎に馬數一百疋を以て群とする也、然共牧の廣原に依て亦馬數あり、牡は父馬なり牝は母馬なり、たとえは牡馬二疋に牝馬十疋を遊會するを以て定數とするなり、其牧馬の長帳には庶人の内にて清體堪えて能く牧を檢校すべき者を取て

用ふべし

牧には牧毎に長一人帳一人を置也、牧子は群毎に牧子二人也

牧の牝馬四歳にして遊牝して五歳にて駒を生す其産する所の駒の數大概母畜五十の内より駒三十疋生する者也、亦三歳にして遊牝して駒を生する者は簿を別にして寮へ申すなり。(中略)

牧の駒者毎年九月十日其牧々に生する駒を改正す、信濃、甲斐、上野、三國者司と牧監也武藏は別當と主師也(主師は牧の長に准して易部當番也)

監牧駒二歳に至ては駿賀の相法を以て細馬中馬、下馬、を分ち其帳に署し、齒四歳に至て再相して體骨強く狀稍乗用に調良たらん駒に官の字印を以て左體上に檢印す、慣には右體上に印す並に印訖て具に毛、色、齒、の歳を其に録て簿兩通を爲り一通をば其所に留め今一通をば朝隼使に附て太政官に申すべし明年八月に牧監等に附て貢上する也若當團の兵士の内に畜する間に官馬中らざるは驛傳馬になすなり、牧駒の内細馬なるを軍團に付國司に副て兵馬として其くに、置駒あり皆國司の御馬

なり、牧駒四歳にして官馬に中らす兵馬に中らざれば賣却して其代を牧長集取て國司及別當の人より厩牧令へ貢上するなり(中略)牧々の牡馬耳印の馬死に失せ或は狼に害せられて減少せば厩牧令へ申して其馬群に満すべし、

牧の地は山を片會に取て廣原の地を用ふ其牧の地を年毎の野火を放して枯草を焼くべし北地は寒く遅く暖也、南地は陽にして早暖也、是故に二面に焼也草生するに至て遍く萌出る物なり亦山林竹林の地は燒ざる法也。

上記述せる處によりて考ふるに、中古馬政の精密にして頗る發達せしを窺知するに足るべし。下りて保元平治の頃より、源平二氏の盛衰ありし間盛に騎鬪を用ゐしかば又牧馬の政も發達せしものありしならん、彼の源軍の馬匹に富むは史上に明かなる處なり、即ち源氏が根據地たる奥州よりは、頻に良馬を産出し、彼の生厩、及摺墨なども、皆奥州の産にして、生厩は陸奥國七戸牧に、摺墨は同國三戸牧に産出したりと云ふ、今茲に知り得たる奥州の牧を擧ぐれば左の如し。

陸奥 車返牧 高楯牧 遠田牧 深田牧

尙單に奥州として記載しあるを記せば左の如し。
柴田牧 黒河牧 竹城牧 大谷牧 志田牧

馬に關する古の禮式作法

馬匹に關する禮式作法は、其昔種々様々の事ありたらんも、詳細にこれを取調る暇なし、故にこゝには唯面白しと思ふ事のみを大坪本流、大坪流、軍馬秘要及小笠原家馬法禮などより書きぬきて、左に記す事となしぬ。

正月乗初の禮式

大坪流本

正月乗初の時は芦毛馬に白色の裝束して引出し明の方へ向け其後場中を三返引廻し亦明の方へ向て置也是は歲中の馬場發祭の馬の災を除く祭也、同乗初に駕馬は青毛栗毛雲雀毛右の馬を乗つしゆめく陰馬を前に乗と在べからず、乗人は衣服を改め素袍袴を著し指懸をさし沓をはひて策を腰に納め扱馬を明の方へ頭を牽向け騎也、騎するや六合拔清之策を打て加持すべし地道三返馳七返乗納の地道二返也たて十二返乗へし

但し閏月の時は十三返乗也陽月の閏ならば馳八返、陰月の閏ならば乗納の地道三返也納むる時も明の方へ馬を向て置べし(中略)同乗初には退口を引くとなかれ口を割て乗る事は猶以て嫌ふる也勿論繩差に乗る事大きに忌也能く心得べし

「繩差て」は銜取繩の類也小仲間是不吉

婚姻の對駢馬

大坪本流

婚姻の時の駢馬は騷を吉とす馬具は白色を懸へし追繩は愛敬結にすへし舍人は是兩親有之人の役也

聳引手物に遣す馬

聳引手物に遣す馬は陽馬を吉とす就中青毛馬可也兩匹引時は陽馬を引者也、青毛黒毛也馬具は一匹の時は陽色兩匹の時も陰陽の色を懸へし此時請取渡しの法あるべし一族の人の役也

馬請取の事

是は公人より貴人へ御馬被下時請取渡様の事なり、其貴人の官に依て請取人上手下

手の禮あり、其業課馬に褌はきまを着なり、仕懸轡を嚙すなり渡様は手綱を馬のかうに懸けたるを前にはずし左の水付を頤の下より右へ廻し右の水付と一つに左手に啗と取又手綱を輪に二つたくりて左に取り餘る手綱を右の大指にかけ引延し左の拳は仰け右の拳は臥せて取り左右同かたさに構へ馬を靜に引立少し會釋して渡す事なり請取る人は馬の後と左方に二間計隔てつくばい居り、貴人請取れと有る時馬のあとを遠く左の方より廻り中腰にて請取と也請取様は左の手にて渡す、人の左に持たる手綱を其儘輪と共に取る右に持たる手綱をば左の手の下より右手を出て請取る、渡たる人退居したるを見て其儘貴人の前に參り馬の面を御目にかけて馬の向に立ち兩の轡を取り左の足を後へ少し引て馬を一足牽出し右足を踏込みて馬を少し後へ退らせ又右の足を後へ引て又すこし牽出し靜に左の方へ牽廻し妻戸口にて舍人に渡す事也

馬拜領の事

是は貴人より其家の長臣或平士にてもゆゑありて馬を賜る事有る時拜領する人下た手に請取る手綱の禮あり渡す人は前の渡様の如く左右に手綱を持ち御前に引立て居る

時拜領の人渡す人の右の方より向ひ中腰になり渡す人の左に持たる手綱を其儘にて右手に請取り又右に引延て持たる手綱を左手に請取りすぐに左右へ取直し貴人の方向ひ左手を上へ右手を下になし手を重ね手綱を戴きて後左手を馬の頭の下より左の轡を取り右にて右の轡を取左の肩を頭の下へ入れ馬を負ふ如くになして一足退らし左へ廻し直に退去する事也右の禮は古禮にして重き禮なり昔鎌倉將軍鶴ヶ岡の若宮の寶殿むねあげの時工匠に馬を賜りし古實もあり。(下略)

神佛前乗の事

是は神社の前を乗過る時又佛前を乗通る時も馬上の禮ある事也、其業は左に綱の露を取りたる如く右の方にも手綱の露をとり、佛前の方の足を笠のあとの方へ、はつし力革をしめて禮をなして乗過るなり、手綱の露を左右へ取る事は心を清淨にするの理なり足を笠の波切にちくも足を清むる心なり、

御前乗の事

是は貴人の前にて乗時其禮有事なり先づ、タトウ紙を披き置き其上に扇子を披き置

き扉子の上に鼻紙袋を置き衣紋を能く償ひ脇指をかため皆具をよく見て乗るべし、さて乗出し貴人の目通に至て貴人の方の足を、はづして袴の内へかくし一禮をして乗通ると也た、一度なす事なり、

貴人鞍下之事

是は貴人の召たる馬を其儘跡を乗るべしと仰ありて乗る時鐙の禮ある事也先つ手綱を常の如く取て戴き取髪在所を取り左の手にて板馬甕の息通の穴より力革を、なて下け戴き乗る事なり是を鐙の禮と云也

我鞍下之事

是は吾乗りたる馬の跡を貴人召されんと有る時は手綱の禮あり、手綱を板馬甕の上に懸けざる様にする事なり、其業掛めの如くに左の手綱を前輪に掛て引しめ右の手綱とひとつに取合せ其手綱を前輪に一廻しまきて末を前にてはさみ置く事なり、

騎者貴人に對する時

騎者ある時貴人の御言葉御請可申上事

其節前輪に掛り右左の手を取髪の上に置き貴人の御座候方の鐙をはつし御請可申上也

著者云ふ右の外「庭乗り」とて其人の前にて庭を乗る事ありしか四季によりて種々の乗り方あり例へば春は櫻をのこして松柳楓と順序に乗り廻り楓の右側下にて下馬するなど或は雪の朝の乗方は先づ美しくしき雪を散らさぬこそよけれと柳をのこして近路より櫻、松、楓、と人の手の指の如くに乘廻り或は雨の日乗る時は貴人に泥なと散らぬ如く遙か遠くにて柳楓／＼とのみ乗りて柳の下に下馬するなどの古禮も見へたり、されとは趣味少なければ省きて次に古風裝束之事を記さん、

馬の毛色と裝束

大坪本流

法式の時は毛に依て裝束あり、芦毛、青毛、は紫三蓋、白三蓋也、猩々皮、三蓋も用なり、栗毛、雲雀毛は黒三蓋、水色蓋也、黄羅沙三蓋も吉、鹿毛、糟毛は空青三蓋、萌黄也紫三蓋も用ゐるなり鶉毛河原毛は淺黄三蓋、紺三蓋也、水色三蓋も用也佐目毛黒毛は猩々皮三蓋、黄羅沙三蓋也淺黄三蓋も用也口傳、鞞の縫包を尾懸と云赤きと黒

きに定まる也

四節裝束之事

春の鞍は螺鈿の鞍也夏の鞍は目鞍也秋の鞍は白鞍也冬の鞍は黒鞍也又掛りの替庭の時は春は木地鞍也夏は重山鞍也秋は猶地鞍也冬は相間鞍也

春の切付は青漆也夏の切付は栗色也秋の切付は白張皮也冬の切付蠟色也

春の障泥は植毛夏の障泥は滑草也秋の障泥は鈴也冬の障泥は熊也

春の鑑は五六にして時の模様夏も五六にして時の模様秋は金鑑にして時の模様冬も

金鑑にして時の模様あるを掛べきなり

春の手綱は木綿也夏は麻、秋は縮緬にして冬は絹也色は時の色を用ゐるなり

春の押懸は青色夏は赤色秋は白色にして冬は黒色なり

七口鞍の事

白鞍、定まらざる金具摺たる小紋の鞍を云ふ又鏡鞍とも云ふ

黒鞍、蒔繪黒塗りを云也

螺鈿鞍、青貝の鞍を云ふなり

相間鞍、張り色の鞍を云ふなり

重山鞍、黄覆輪白覆輪の鞍を云ふなり又決懸鞍をも云ふなり

日鞍、朱鞍を云ふなり

木地鞍、塗らざる鞍を云ふなり

馬匹を馬屋に入るゝ作法

馬を馬屋へ入る作法は申乃年の女に豆と糠を交させ臼に入れ縮の頭を香に焼き細末して豆の中へ入れ北向に馬を立て右の豆を喰せしむべし、馬櫪神へは批に笹の葉を處次米と洗米を備へ申し、それをも馬に飼ふものなり(以上小笠原馬法禮)又大坪本流には

馬を初めて廐に入る時は何時も最初は左へ廻すべし扱鼻革を掛るといなや大釜の蓋に米味噌熨斗三色を載せて喰すべし

馬屋見物の作法

馬屋へ入れは我が右の方へ次第に馬を見る可し、馬は右の方にあるを一の馬やと云ふ、左の方へ初に見ぬものなり、左の方は馬の左腹立て馬の裏なり、左の方を二の馬屋と云ふなり馬は右方を賞翫するものなり (下略)

乗方に吉日之事

甲辰、乙午、丁亥、庚申、辛酉、辛巳 辛卯、癸巳

馬方吉日之事

朔日、四日、八日、九日、十日(吉) 三日 二十五日(半吉) 十三日、十四日、十八日、廿一日、廿四日、廿七日、廿八日、廿九日(以上大吉)

廐へ馬を入る吉日之事

正申、二巳、三酉、四辰、五申、六巳、七酉 八辰、九申、十巳、十一酉、十二辰 以上吉日也

馬買吉日之事

朔日 四日(吉) 三日、廿五日(小吉) 八日、九日、十日(悦) 十三日、十四日、十八日、廿一日、廿二日、廿四日、廿七日、廿八日、廿九日(大吉)

馬匹齡年鑑定の歌

馬匹の年鑑定を覺へ易き様に作られたる歌あり、左に記して参考となす。

こは戦騎要略と云へる古き寫本にありけるを後藤達三氏か今時のさまに詠み換へたるものなりとぞ。

當歳は乳吸齒うへした四枚はへ

二歳は脇齒また四枚はへ

三歳は邊齒うへした四枚はへ

十二の齒數はへ揃ふなり

四歳にて乳吸齒うへした生替り

五歳で脇齒はへ替るなり

六歳は邊齒うへしたはへ替り
牙も生して齒數さたまる

七歳は邊齒の角かけて見へ

八歳齒並み立そろふなり

九歳より下の乳吸齒草當り

十歳わき齒草あたるなり

十一歳は邊齒草あたり

十二はしたの乳吸臼出來

十三歳は下の脇齒に臼出來て

十四邊齒臼出來るなり

十五歳より上の乳吸齒草當り

十六わき齒草あたるなり

十七歳は上の邊齒くさあたり

十八うへの乳吸うす出來

右の歌によりて、未だ明瞭に鑑定し難しと雖、其大要を知るに於て甚だ便利とすべ
きなり。

以上十數項の記載によりて馬匹に關する予が所感の幾分と希望の若干を羅列し、且
は往古の我國民が馬匹に對する感念の一小部分を窺ひ、以て現時の國民に馬匹てふ感
念を惹起せしめん事を勉めたりと雖、是れ實に予が思想の一端を陳述せしものにし
て、未だ充分の意を吐露し能はざるは最も遺憾とする所なり、即ち終に臨て一言を附
加せん。

何故に我國民か彼馬匹を重用せざるかは實に一箇の疑問にして、我國の地勢か山地
なるを以て比較的馬匹を使用するの區域狹隘なるによるか、或は彼を飼養すべき適當
なる牧草を供給する能はざるに起因せるか、將又國民か一般健脚にして負擔力及輓曳
力に富み、馬匹に依頼せずして克く人を載せて走り、重荷を負ふて行き得るに起因せ

るかを知らずと雖、吾人は實に——我國民が馬匹に對する感念に乏しき、馬匹利用の極めて僅少なるに驚愕せざるを得ざるなり、見よ繪畫の展覽會に於て馬匹の畫き出されたるもの幾何かある、美術の彫刻に於て彼馬の像か刻み出されたるもの幾何かある、或は裝飾品に於て調度器具の模様にて或は紋章に於て旗印に於て、さては小學校の圖書帖に於て、中學校の畫集に於て、彼馬匹の感念が發起せられたるもの幾何かある、或は新聞紙の廣告に於て、將又商估か商標に於て、彼か形に因み彼の姿に寄せたるもの眞に求め得べからざるに非ずや、是れ何が故に然るか他なし國民か馬匹を嗜好せず從て馬匹の感念に乏しきに起因せるなり、加之我國の首府に於て軍隊以外に彼を治療すべき完全なる病院ありや、改装を施行すべき蹄鐵工場の完全に近き物何處にありや、從て一の借馬場なく大なる馬具店、鞭店、拍車店なく此の如くにして一の馬術學校を見出す事能はざる又怪むに足らざるなり、

以上の如く國民か馬匹の感念に乏しきは未だ馬匹の眞價を知らず、馬術の快味を知らざるか故なり、實にや馬匹は天の人類に賦與したる恩惠の一なりと云ふも敢て誣言

にあらざるべく其實用的方面に於ける偉大なる利益と効力は云はずもがな、そが温平たる美はしき姿は人をして嘆賞措く能はざらしむるものあり、殊に馬術の快味は一度これを經驗せし者の忘る能はざる所にして佛人某氏の曰く

「郊外に於て純血種の一種特色たる駈歩の蹄響を身下に聞き、馬頸は伸長して首を伸べ鼻孔を開き、至大の快速を以て原野の生地を掃ふて縦横に駛行するに至ては、其爽快言語に盡すべからず、此時に於て一切の憂苦は遠く飛散し去て、我一身は天涯に翱翔し忽ちにして天國の樂境に遊ぶの愉快を感すべきなり、然して興味歡樂斯の如く深きも、更に後患を残す事なく、しかも實行の容易なるべきもの、決而乘馬の快樂に優るものこれあらざるなり、余輩は以て天帝が人類に惠與せられたる無上の樂事なりとす」

又獨人某は次の事を言へり「現に人を誹るも餘事に就ては彼我共に何等の患害を惹起すべき恐れある事なく互に戒心するに及ばざるも不幸にして彼は乘馬を善くせずと云ふに於ては翌日忽ち決闘の申込を受くべきは必然なり」と

又以て如何に彼の男子か乗馬に趣味を有し乗馬に重を置き、如何にこれを以て名譽とせるかの一端を窺ふに足らん、我國民に於ても馬匹の發達を望まんと欲せば、先づ國民が彼の眞價を充分に認識し、乗馬を嗜むに至らしめざる可らず、夫れ斯の如きに至らば愛馬心の發起著しく、從て馬匹の改良繁殖の如きは期せずして行はるべく、尙武の念も亦自から起らざるを得ざるなり。

あゝ馬匹は天の最大恩惠の一なり、語に云はすや、天の與ふる者を取らざれば却て禍を受くと彼を愛し彼を利用し天意に従ふはこれ吾人の天職にあらざるなきか

(終)

附馬術概要

馬術は馬匹の現存以來世上に行はれたるものにして、實に今より三十世紀の以前に於て既に完全なる斯道の實施せられたりと云ふ、然り而てこの長年月間に於ける馬術の變遷も誠に諸種なるべく、殊に各國によりて其趣を異にしたるは恰も各國の人種言語に各差別あるが如く決して怪むに足らざるなり、然りと雖馬術の原理に至ては悉く一致せられたるや疑なきなり。

上古は知らず近世各國に於て各一派の馬術を稱へ、各其獨特の長所に誇り、甲論じ乙辯し以て各一流の нова法なりと稱揚するもの多しと雖、そが大部の説述に於ては敢て異りたる所なきなり、彼の英佛獨に於て盛に各自が自信せる一流の學説を稱へ佛國の馬術家「コントドール氏」は自己の法式を論じて馬術の正當なるものとなし、獨國の馬術家「ボーシエー」氏も亦嶄新なる新原則を發表して最良の法式なりと叫び、或は英の馬術家「マッケンジーグリーヴ」氏も亦一種の馬術論を稱ふ、其他「ルイ、ゼ

「ゲル」「シールドグリン」或ハ「ド、ブリュウキネル」等の馬術家を出し、此の如くにして是等幾多の馬術家が自己の経験に徴し研究に鑑み相互に論攻論難する所實に偉大なる趣味を有し、頗る多大なる利益を斯道に與へたるは馬術の發達進歩に於て實に歡喜の至りに堪へざる所なりと雖、結局是等の馬術家が大論も皆一原理に歸すると云はざるを得ざるなり、何ぞや馬術は一の馬に乗るの技術にして其方法手段に至ては實に千差萬別極りなしと雖其要は

馬匹か天賦の機能を害せずして人馬一致し克く權衡を保ち馬上の主權を掌握するにあればなり

抑も馬術は統然たる一科の技術にして、斯道の熟達を得んには實に幾多の歲月と多大なる熱心とを要すべきものとす、然れとも何等の技術に於ても其熟達を得んことを望まは皆此の如き要素を必要とするは勿論なりと雖、この馬術の如く一種云ふ可らざる興味を有し、其進歩に伴ふて着々快味を覺え、遂に忘るべからざる興趣を有するものは他に其比類稀なるべし、

熟練に達したる彼馬術家「ボウセー」氏の如きは實に人馬の一體を得たるものにして、彼は馬匹が天然の熱力(この熱力なる意味は馬匹元來の抵抗と解せば可ならんとの説あり)を撲滅し之に代ふるに移轉の勢力を以てしたるなりと、詳言すれば氏は一度全く馬匹を無きものとなす迄克く掌中に握り、彼が何等の抗拒もなす能はざるに至らしめ、更に駿手の意匠に任かせて適當なる馬匹を造り立てんとするの技術にして、獨り彼「ボウセー」氏のみ此の如く克くなし得たりと云ふ、されば彼は常に人に語りて曰へり「凡そ悪き馬と云ふ者は決して無きなり」と、かくの如くにして彼が技術の發達は遂に馬匹をして後方に馳走を爲さしむるに至れるなり、實にや彼が門生中馬匹を一度無きものとする事のみは十分に實行し得たりと雖、更に之を我意匠の如く造り出したる事は何人も目撃したる事なしと云ふ、これ即ち大馬術家「ボウセー」氏獨特の技能にして、馬術の進歩以上の如く頗る巧妙の域に達し得ることを記載せば、讀者は彼の曲馬師が一種不可思議なる奇戲を演ずるを以て、彼等の技術を巧妙なる馬術として贊賞する人のなきかを恐るゝなり、否乎は某氏か曲馬師の演藝を觀て、かくまでも馬術の進歩せるかと嘆賞せられたるを聞

きたる事あり、されば今茲に彼曲馬師が演ずる一種の技藝は全く馬術の主旨に反せるものにして、彼が技藝は馬術の部類に屬せざる事を説明せんとす。

曲馬は馬術にあらず

佛國男爵「デトレイ」氏馬劇場の馬術を評して曰く、曲馬師が技を演ずるの主眼とする處は觀客の喝采を得んとするにあり衆人の賞賛を求めんか爲めなり、毫も馬匹に對する感念は無しと云ふべきなり、されば曲馬師は馬匹を以て無情無感の一器械として使用せん事を勉め、彼馬が勞苦悲慘眞に堪ゆべからざるに啼くも、恰も關せざるが如く唯一途に觀客の喝采を博せん事を冀ふものなり、故に彼は馬匹か天賦の機能を盡滅し地上に固着せしめたる死物の如くにして、否寧ろ一個の機械の如くにして哀なる馬匹か諸種の技を演ずるは恰も機械か發條の作用によりて動き出すと何等異なる所なきなりと。

かくの如くにして馬匹は全く一の活動物にあらずと稱すべく曲馬師か粗暴なる手段苛酷なる所爲に對して抗拒すべき氣力を存せざり、尙彼曲馬師は困難なる技を演ぜ

しむる以前に於て、或は糧を絶ちて教へ或は水を與へずして教へ、彼馬の體力衰へ心氣屈する至らしめ遂に其目的を達成するに至る、何ぞ夫れ從順なる馬匹を取扱の此の如く甚だ慘酷なる唯驚愕の至に堪へざるなり

馬術に至りては全く以上に反し、彼曲馬師か馬匹に施する如き苛酷なる手段は毫も存せざるなり、否寧ろ

馬術は彼馬の爲めに成るべく勞苦を排除し勉めて歡樂を得せしむるを謀るなり、即ち彼が識別、記憶、感情、比較の諸能力を保有せしむるなり、尙出來得れば彼に不快を感せしめざらん事を勉むるなり

されば「ポーウシエー」氏か如何に巧妙に馬匹を乗御すると雖、尙天賦の機能を損せざるなり、故に能く幾多の運動に堪へ得べく數多の勞役に服せしむべく、即ち馬匹は活力を以て常役せらるゝに差支なきのみならず、却て要役に適し得るに至るなり、何ぞ夫れ兩者の差異以上の如く甚しき

然れども曲馬師の使用せる馬匹か能く長途の駿乘に堪へ、幾多の勞役に服し得る事

を得は或は一種の馬術に近からんも、予は此の如き事を信し能はざるなり
 尙更に予は馬術の特色につき附加せんとする事あり、即ち馬術は以上の外高尙、壯
 觀、優美の諸點を備へざるべからず、人が馬上に跨るに於ては既に、高尙と壯觀なる
 感念を發生せしむるは確的な事實にして。こは自然に發生する處の外觀なりと雖、
 尙騎手が姿勢に於て其態度に於て益々これが養生に勉めざる可らざるなり、彼の軍隊
 に於て整々嚴肅なる動作をなすを以て乗馬の姿勢が一種壯觀を要するに非ず、既に馬
 術なるものに於て缺く可らざる特色なりとす、故に地方の人士に於ても騎乗の姿勢態
 度に缺く可らざるなり、加之彼の婦女子が乗馬に至ては更に優美的なるを要するなり、
 寧ろ壯觀なる點を多少減少する事あるも高尙と優美なる二點は一層の増加を要するな
 り、婦人の馬術か威武誠に盛にして壯觀頗る見るべきものありと雖、優美高尙の點を
 缺くに於てはこれ婦人の馬術として賞揚すべきものに非ざるなり、然らば馬術は高尙
 にして壯觀を呈し而かも優美の點を存して馬上に餘有あり極めて軟和にして彼か天賦
 の機能を減少せしめず、以て人馬の一致同體を得馬上の主權を保持したらんには始め

て眞の馬術なるものゝ生れ出でたりと云ふべきなり、何ぞ夫れ曲馬師か彼馬匹を死物
 として機械的に取扱ふと其懸隔の甚敷偉大なる。

平衡馬術

完全なる馬術を會得せんには極めて至難の事業にして、到底吾人の如き斯道の若輩
 が茲に論述すべき資格を有せざらんも、其原理に至ては苟も乗馬の心得ある者の理解
 せざるべからざる事項なりとす

其原理とは如何、即ち人馬の平衡を得て馬匹を乗御するなり、換言すれば彼馬をし
 て自己の重心を移轉せしめ、以て自然に運動を行はざるを得ざるに至らしむるなり、
 故に馬術の始めに於てはこの重心を移轉せしむべき運動姿勢を教育するにあり、彼馬
 が既に正確なる運動姿勢を取り得るに至れば、自然に運動を實施し得るに至るは重學
 上來り得べき天然の現象にして、毫も怪むに足らざるなり

以上の説明により讀者は尙未だ其原理を解得するに困難なるべし、依て左に之を詳
 説せんとす

獨國馬術家「ルイ、ゼーケル」氏曰く
馬體の重心は彼が第十一と第十二肋骨の間即ち第十四背推骨の下方にありと想像するを得るなりと

されば馬體の重量は彼が前肢に於て比較的多くの重量を支へられ、後肢に於て幾分の重量を減せらるゝなり、實にや彼の前肢が垂直にして克く體重を負担するに適すると同時に其蹄形も後肢に比して偏大なる所以にして、又輕き負担にある後肢の任務が體軀の推進にあるを以て、其蹄形の小にして尖形に構成せられたる所以なり

彼馬は鞍上人なきもよく自己の重心を移轉して、諸種の動作をなすは既に世人の知れる處なりと雖、唯其着眼の異なりたるのみ、

今馬匹が底地にある草を喰まんとするや、先づ前肢の一方を前方に踏み出して後其頭頸を底下し草喰むを見るならん、是れ何故に然るか彼が前肢の一方を踏み出さざるも、兩前肢を揃へたる儘にて少しく其關節を屈したらんには、悠々草喰むを得べきなり、然るに彼が必ず或一方の前肢を踏み出すは他なし、全く重心の移轉に對して平衡

を得んが爲めなり、即ち彼の頭頸が底下したる時は彼の重心が前方に移轉せしを以て、無止前肢を踏み出して其基面の擴張を求め、前方に轉倒せざらん事を勉めたるなり、この例證によりて讀者は馬の重心が前方に移轉したるを以て彼自ら其體軀の幾分を前方に進めたるを記憶せざる可らず、換言すれば馬は其重心が移轉したる方向に自己の體軀を進ましむるものなり

又彼馬が前肢を高く上げて歩む時には其頭を起揚しあるを見るも、彼が迅速なる速度を以て行進しつゝある時に、其頭の高起しあらざるを認むるなるべし、是れ重心を前方に移轉せざる時は急速なる運動を行ふ事困難なるを以てなり

又彼馬が將に起揚せんとするや必ず後肢を體下に踏み腰を底下し、自己の重心を後方に移轉したる後前軀を起揚するを認むるならん、

又彼馬か頭を上げて物を蹴りたるを認むる事あらざるべし、彼か蹴らんとするや先づ頭頸を下げて自己の重心を前方に移轉せしめ、同時に其重力平衡の力を以て蹴り出すなり

「騎手か馬上に於て馬を御するも亦此等の理を應用したるに外ならざるなり、故に馬術は馬を運動せしめんとするの困難に非ずして、馬匹に重心を移轉せしむべき運動姿勢を要求するの困難なるなり、この運動姿勢を與ふる爲めには馬體の諸關節筋肉が柔軟ならざる可らず、關節筋肉の柔軟なるに至て始めて騎手の扶助に従て任意の姿勢を取らしむべきなり、然らば如何にせば其關節筋肉を柔軟ならしむべきか、他なし馬の勢力と平衡とによりて求むるなり(こゝに記載せる運動姿勢は單に内方姿勢のみならず、凡て運動を起さしむべき姿勢を云ふ以下同し)

元來馬匹は其體格に於て其力に於て吾人に超越せる事甚敷を以て、到底威力的に強制し得るものにあらざるなり、故に吾人は彼が有する勢力を利用して自ら平衡を求めつゝ柔軟を施行し得る如き手段を取るべきなり

例へば今右後肢の柔軟を求めんと欲せば、騎手は彼の右後肢か體下に踏み込む如く右手前の輪乗を行ひて彼が無止右後肢に自己の體重を負担して平衡を保ちつゝ行進するに至らしむ、此場合に於て速歩を要求したらんには彼馬は益々自己の體重を右后肢に負担せしめ、勢力と體重によりて其關節の凝固を解くに至るなり、此の如くにして

諸關節諸筋肉の柔軟を求め以て任意なる運動姿勢を要求すべく從て意の如き運動を生せしむるに至るべきなり、今茲に馳歩につき運動姿勢が如何に運動を發生すべきかの例證を説明せん

今速歩行進中にある馬匹に左馳走(左馳走とは左前後の肢か右前、後の肢より前方に進むを云ふ)を發生せしむべき運動姿勢は次の如し

騎手は充分に兩脚を操作して馬を韁上に壓出し、さて内方(此場合の左方を云ふ次下同し)脚を使用し馬の内方後足を踏込ましめ外方脚は腹帶後に支へ次に内方拳を體に近けつゝ軽く控へ外方韁は適度に之を節し彼馬をして項を屈撓しつゝ頭を軽く内方に向はしめ外方韁に支持を取らしめつゝ行進せしむべし

この場合に於ては左方の前後肢は右前後肢より前方に進出するに至るを見る、これ馬の重心か内方に移轉するを以て彼が平衡を求めんとするによるなり、かくの如く内方の前後肢か前方に進出して軽く運動するに至て尙騎手の體量を内方に偏する時は馬は益々其平衡を得んか爲めに外方(此場合にて右肢なり)の肢に方を入れて行進し愈々内方側の肢

を輕快ならしむるに至る、以上の運動姿勢を取りたる後に僅少なる左脚の壓迫によりて左馳走に發し得るなり、即ち左前肢か今將に地を離れんとする瞬間に於て左脚を輕打したらんには先づ左前肢より地を離るゝに至る、何となれば彼右肢を左前肢より前方に進ましめんとするも右の前肢は力を込めて重く歩みつゝありしを以て無止自然に輕き左前肢を前方に踏み出すべきなり、かくの如くにして左前肢先づ地を離れ次に右前肢と左後肢次に右後肢の順序を以て三節に地を離れ、着地は先づ右後肢地に着き次に右前肢と左後肢次に左前肢の順序を以て三節に着地するを見るべし、以上の説明に於て讀者は左の疑問を生すべきなり即ち

- 一、重量の多く負担せられたる左肢が何故に輕きか
- 二、左前後の肢が輕くなりたるものとすれば何故に左側前後の肢が先づ同時に地を離れざりしか

この疑問對して予は次の如く説明せん

第一疑問の答解

重量を多く負担したるの肢か他の肢に比較して輕きは、實に重學上來り得べき結果にして彼馬か平衡を求めんとするに起因するなり、今左方に重量を負擔せられたるを以て彼が其儘になしあらば左方に轉倒するに至るを以て、勢ひ自己の重量を右方に寄せ右側に力を入れ平衡を得ん事を計るなり、從て左肢の輕きを來すの理ならずや、然れども馬は其一側に於て騎手の體重の二分の一を托されたりと雖も、決して轉倒する迄に至らざるも彼が兩肢に平等に力入れたらんには左側の重くして行進するに甚しき困難を感じるを以てなり、尙ほ人につきて例證を示せば左手に重荷を携へて歩む人は、必ず自己の體重を右に偏して歩まざれば其歩行の至難なるを知り得るならん、此時に於て左足を前に出すは易くして右足を前に出すの困難なるべし、これ右足に多くの力を注ぎ平衡を得んとしつゝあればなり、彼馬の肢も亦全く是と同様にして其重量を托せられたる方側の肢が輕快に運動すべき所以なり

第二疑問の答解

輕快なる左前後の肢が同時に地を離れざるかの疑問に對しては先づ馬の歩法を説明

せざる可らず、元來馬匹は其歩法に於て自然に安泰の状態を求めつゝあるなり、彼が常歩を以て行進するや常に四節次にして左(右)前、右(左)後、右(左)前、左(右)後の順序を以て常に斜對線上に行進するなり

又彼の速歩は二節次を以て行進するものにして左(右)前肢と右(左)後肢と同時に地を離れ、次に右(左)前肢と左(右)後肢と同時に地を離れ二段に斜對線上に行進するなり又彼の馳歩に於ては三節次を以て行進し先づ左(右)前肢次に右(左)前肢と左(右)後肢同時に地を離れ終に右(左)後肢地を離れて斜對線上に三段に行進するなり

以上の如く三步法とも其節次を異にすると雖も常に對角線上に足を運び、決而同側に同時に地を離るゝ事なきなり、これ全く馬匹が安泰の状態にあらん事を希望するものにして、自然かかくの如くなさしめたるものならん、されば左馳走に於て左側の肢が同時に進出せざるも全く、彼が安全の姿勢を保たんが爲めなるに外ならざるべきなり

以上の説明により讀者は運動姿勢が馬匹の重心を移轉せしめ、彼自ら平衡を求めん

が爲め自然に運動を發生せしむべきものなる事の一端を窺ふに足らん、然りと雖これ等の學說に於ては實に數多の議論を有し必しもこの論法を以て眞誠なるものと主唱する者にあらず、唯々予か獨り研究して自信せる所の一説を記載せるなり、尙以上の理由を約言すれば、騎手か馬匹の重心を移轉せしむるを以て彼は轉倒するを防がんが爲め諸種の運動を發生するに至ると云ふも可ならんか、去れば馬匹か彼犬猫の如く容易に轉倒するものなりとせば倒底馬術なるものは成立せざるべしと云ふも過言に非ざるべし

然れとも運動姿勢なるものは、云ふ可く甚だ容易にして、行ふ可く甚だ至難なるものなり、感情ある彼動物に對して完全なる運動姿勢を要求せんとするは、技術の熟達を要すべく而てこの間に於て幾多の巧妙なる手段方法の存すべく、到底一朝一夕に論述し得るものにあらざるべく、又是等は吾人か充分に會得し能はざる所なり、然と雖茲に普通の乗馬者に於て最も緊要なる一事あり、とは騎手が馬上に於て馬體各部の運動を感知する事なり。

騎手の感覺

極めて熱心なる騎手と雖、其要點に着意せざれば馬術の進歩を見る事能はざるべし、騎手が馬上に於て着意すべき要點多からんも、騎乗中馬體各部の運動を騎坐、脚及手中に感知するの英敏なるは確かに着意すべき要點の一なりとす

今騎乘に於て彼馬の四肢が、何時舉揚し何時着地しつゝあるかを感知するは、最初に於て必要なる事とす、彼が肢を舉揚する時と着地する場合とによりて、彼の運動姿勢を要求するに容易にして、而かも運動を發せしむるは此時機に投ずる事最緊要なり、例へば今馬か肢を着地せんとする少し以前に於て、駐立を命じたらんには甚容易にして、既に着地したるの後に於て駐立の扶助を用ゆるも好時機は過ぎ去りたるなり、彼の馳歩に發せしむる場合に於ても、前肢か將に地を離れんとする時機に扶助を操作するに於て効力ある如く、或は行進中の旋回の如きも駐軸となるべき肢か今や將に着地せんとする時に於て扶助を施したらんには、極めて輕快に運動せしむべきの理にしてこれ等は皆騎坐によりて感知せられ得る處のものなり。

其他騎手の施すべき極めて微妙なる諸扶助を、彼馬か如何に良解しつゝあるかは、自己の脚拳に於て最も注意深く感知するを要するなり、唯徒らに扶助を用ゐてこの馬は扶助に従はずなど稱するは誤れり云ふべきなり、予は山來馬匹が、かく迄も騎手の扶助に對して注意深きかを知らざりしなり、されど頃己が新馬は極めて遲鈍なる馬匹なりと輕視したるに、騎手か注意深く扶助を用ゆるだけ、彼も亦一層の注意を以て其扶助を味ひつゝあるを發見したり。

されは注意の足らざる騎手が何氣なく操作したる扶助も、彼馬は其何の意なるか、小きさ腦裡に判斷しつゝあるなり、又無雜作なる騎手か馬上平然として歩みを運ばせ散り來る櫻の花に懷を寄せつゝ、知らずくして觸るゝ脚も馬は正直に而かも直ちに其命令に服従しつゝあるなり、彼は常にく其耳を聳て或は回轉して騎手が下すべき扶助の如何なる種類に屬するかを判斷せん事を勉めつゝあるなり、故に騎乗の騎手は尙更に一層の英敏なる感覺を要すべきは勿論なり。

元來馬匹の體格は平等に發育せられたるもの甚だ僅少なるを以て、其構造上より騎

手の要求に對して抵抗を試むる事あり、或は某部の凝固なる爲め無止其苦痛を脱せんとして騎手の扶助に抵抗する事あり、或は更に意思上より抵抗を試むる事あり、これ等の抵抗が何の原因より來れるかを探知するは、實にこの騎乗に於ける感知によつて知り得べきのみ、故に騎手は最も注意深く最も綿密に扶助を操作して、馬體より來る感覺を緻密に研究したらんには其抵抗の原因を探知し得べく、遂には彼馬か何處の凝固せるを以て其扶助に従ひ難きを答ふるの聲を聞き得べきなり。以上の如く騎乗に於ける感覺を英敏にし始めて其抵抗の原因を探知すべく是か撲滅によりて正確なる運動姿勢を取らしむべく、從て規正なる運動を施行し得るに至ると云ふを得きか。

馬匹の抵抗

「ポーションエー」氏馬匹の抵抗力に説明を與へて曰く

抵抗力と稱するものは馬匹自己の任意に發生する所の勢力にして之に依て以て馬匹自身の利益を争はんとするものなり

馬匹か騎手に對して抵抗をなすは、實に彼自身の利益を争はんか爲めに發するもの

にして、彼某所の凝固なるか爲めに其痛に堪へずしてこの苦を除去せんか爲めに抵抗をなし、或は彼か構造上より騎手の要求する扶助に従ふの困難なるを以て抵抗を試み、或は障礙を恐怖するによりて抵抗を表し或は同種族を慕ひて其方向に走らんとして發生する抵抗、或は舊厩を懐ひ或は離別を嫌ふ等實に諸種の原因によりて抵抗を試むるものなりと雖、是れ皆彼か利益の爲めになすものに外ならず騎手が其原因を探知して以て、其抵抗を撲滅するは最大緊要なる事項にして、騎手の感覺によりて探知せらるゝは既に前述せるか如し。

予は茲に馬匹の抵抗は唯單に彼が恐怖或は痛苦の爲めに發するものみなるか或は、彼か固意に發生する事ありや否やを研究せんとす

某馬術家は曰く馬匹は元來最從順なる動物にして彼は恐怖或は痛苦の感念なくして決て騎手に對する意思上の抵抗を有するものにあらず、彼か騎手に對して抵抗を試むるや必ず體格上に於て甚敷苦痛を覺へ、或は彼の某局部に於て堪へ難き勞苦を感ずるを以てなり、故に彼か抵抗の原因は肉體上より來るものにして決して固意に抵抗をな

すものに非らざるなり、今其例證を示せば茲に一頭の馬匹ありとせんか甲騎手が乗りて意思上より來る抵抗なりと判定するも、更に乙騎手が乗りて毫も意思上の抵抗を見出すなく克く諸扶助に従て運動したりとせんか、是れ甲騎手が意思上の抵抗なりと判断したるものも眞の意思上の抵抗に非ずして、彼馬か某局部に痛苦を感じたるを以て該騎手に抵抗したるなり、然るに乙なる熟練の騎手が新に試乗して此痛苦を減して極めて巧みに乗御せしを以て彼馬は遂に痛苦を感じる事なく能く從順に運動したるなり、即ち馬匹か固意を以て騎手に對する抵抗と判断する者は、皆此の如き原因を知らざるものにして寧ろ馬術の熟練を缺ける人々と云ふも過言にあらざるべし、夫れ然り馬匹の體格は平等に發育せるもの僅少なるを以て、乗御に於て肉體的抵抗を發起するは自然の結果にして怪むに足らざるべく、今茲に完全に調教せられたる馬匹に、熟練なる騎手が乗りたらんには必や彼馬は幾分の抵抗をも發する事なかるべしと

予は馬匹の抵抗か意思上より來る事なしと呼稱する論者に對して、更に語り出さんとする事項多し曰く彼論者の言眞に一途の理あり然れとも唯一場の空論のみ

茲に一頭の癩馬ありとせんか彼は如何なる熟練の騎手をも試乗する事を許さず、唯彼に毎日飼料を與ふる所の馬丁をのみ能く其背上に跨らしむ、是れ何の原因によりて然るか思に彼が意思上の抵抗は茲に表れたるものに非ずして何ぞや、即ち彼馬か馬丁に乗るを許して騎手に試乗を許さざるは全く彼の意思上より來る抵抗にして、此場合に於て彼か馬體に何の痛苦を感じて抵抗を試むるか、如何なる肉體上の苦みを發生して騎手に試乗を許さざるか、是れをこれ彼の意思より來る抵抗となさずして何種に屬せしむるか

然れも前論者は尙更に曰ふならん、彼の癩馬か馬丁に騎乗を許して熟練なる騎手に試乗を許さざるは、勿論彼が肉體に何等の痛苦を感じる事なきも、是れ彼が恐怖心の然らしむる所なり未だ以て固意による抵抗となす可らざるなり、何となればこの馬匹は元來人に對して安心をなさず、人は常に己れを害するものとして甚敷恐怖したるものなり、然れとも彼の馬丁は毎朝毎夕彼に最も樂しき飼料を給するの飼主として、彼が人を恐るゝの念慮はこの馬丁なる飼主に於てのみ減せられ、此馬丁に限り安心をなせ

るを以て悠々然として最も安態に自己の背に跨るを許すなり、されば曩に試乗を許さざりし騎手も彼馬丁に代りて、數句該馬匹に飼料を給したらんには必ずや悠々試乗を許すに至るべく、何ぞ彼馬丁一人にのみ限るの理あらんや、即ち彼は故意によりて騎手に抵抗を試みたるにあらず、一の恐怖心が抵抗を表したるなり

予は論者が言の一理あるを賞し、更に一步を進めて意思上の抵抗を有するものなる事を説明せんとす、今茲に一頭の從順なる馬匹ありとせんか彼は馬場内に於て毎に／＼克く騎手の命に従て動き決て抵抗を試むる事なきもこの馬匹が春陽の候に於て効野を歩む時は萌え出づる若草を喰まんが爲めに騎手の韁に對して抵抗して其の意を果さんとするは如何又彼が隊伍に列しある時に唯一騎己れのみ進み出んとする時は退却して騎手が脚の命に従はざるは如何、又彼は己が厩の傍を過ぎ行く時に其入口に向はんとして韁に抵抗するは如何、又彼は駉馬なるを以て牝馬の姿を見て殆ど狂せんばかりに騎手が韁に抵抗して走せ出すは如何、以上數種の場合に於て彼は肉體の痛苦に堪へずして騎手に抵抗したるか、或は何に恐怖して騎手に抵抗したるか、予は前論者

か痛苦と恐怖の外抵抗を爲さずと云ふの理由を發見する事能はざるなり、何となれば以上の如き數例は皆彼馬が固意によりて騎手に抵抗したりと判定すべきなり、その抵抗力の多少を問はず或は其抵抗の滅せられたるに關せず、僅少の抵抗を試みたるも抵抗は抵抗なり、予はこの故意になる馬匹の抵抗が騎手によりて撲滅せられ得ずと云ふに非らざるなり、否悉く撲滅し得べきものなり、

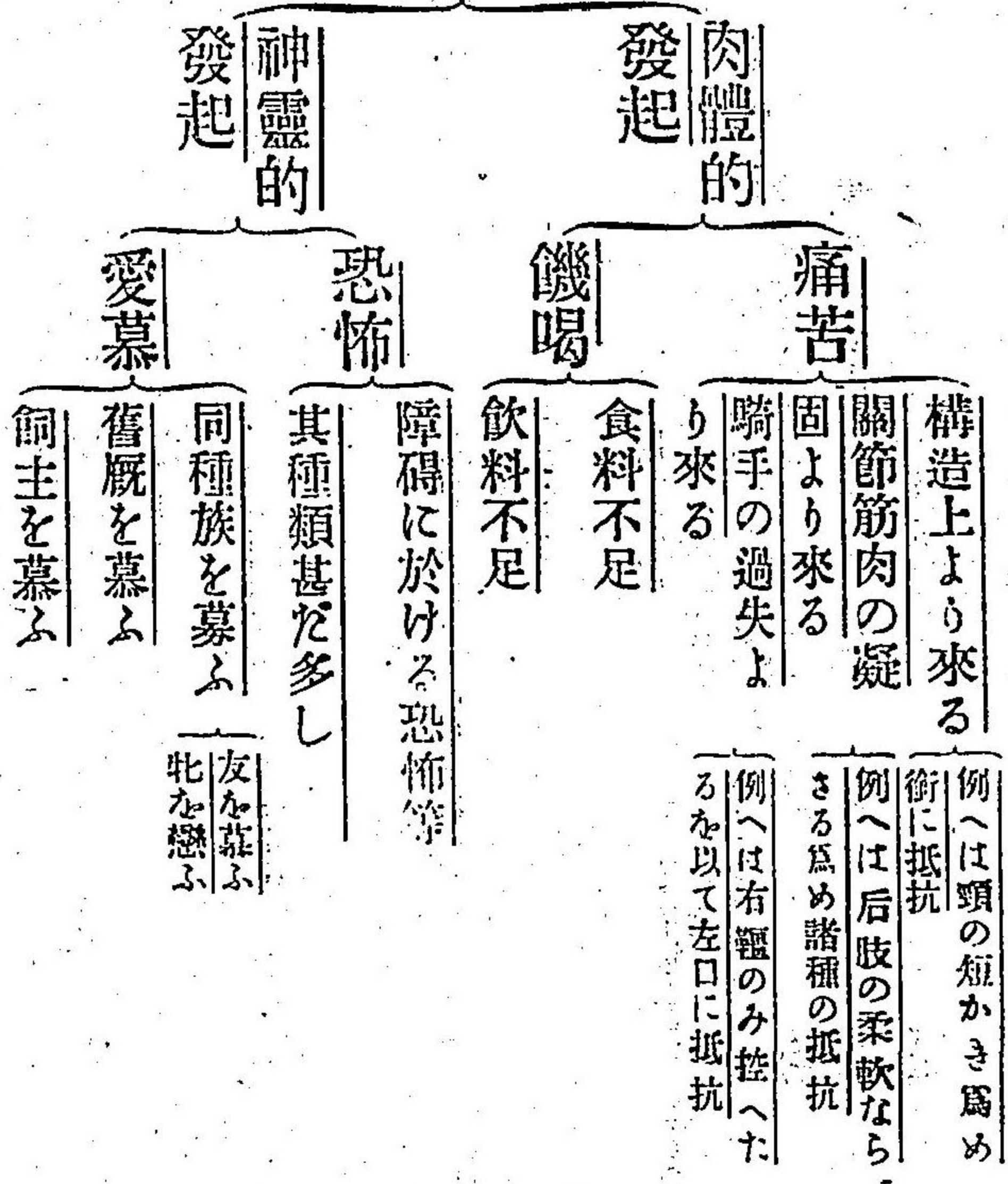
以上の如く論し來れば馬匹は或場合に於て意思より故意を以て騎手に抵抗を試むる事あるものなりと云はざるを得ざるなり。

是を要するに前述の研究は予か唯一箇の私見にして尙ほ充分なる斯道の研究を重ねたらんには或は他に驚くべき理由を發見するに難からざらんか。

予は試に馬匹の抵抗を左表の如くに分別したり、然れともこれ又此の如く判然たる區別を有するものにあらざるならんも記して以て諸賢の教を乞ふ。

馬匹感終

馬匹の抵抗



明治四十年五月廿五日印刷
明治四十年五月廿八日發行

定價金五拾錢

不許
複製

發大發
行所

東京府下中濠谷二百七十一番地
東京市神田區表神保町三番地
東京市日本橋區數寄屋町

三東關
京勝
堂閣

著作者 佐々木一雄

發行者 石倉重繼
東京府下濠谷村字中濠谷二百七十一番地

印刷者 飯田三千太郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

31
334

民國三十一年四月廿九日

（日期）

第 一 次

第 二 次

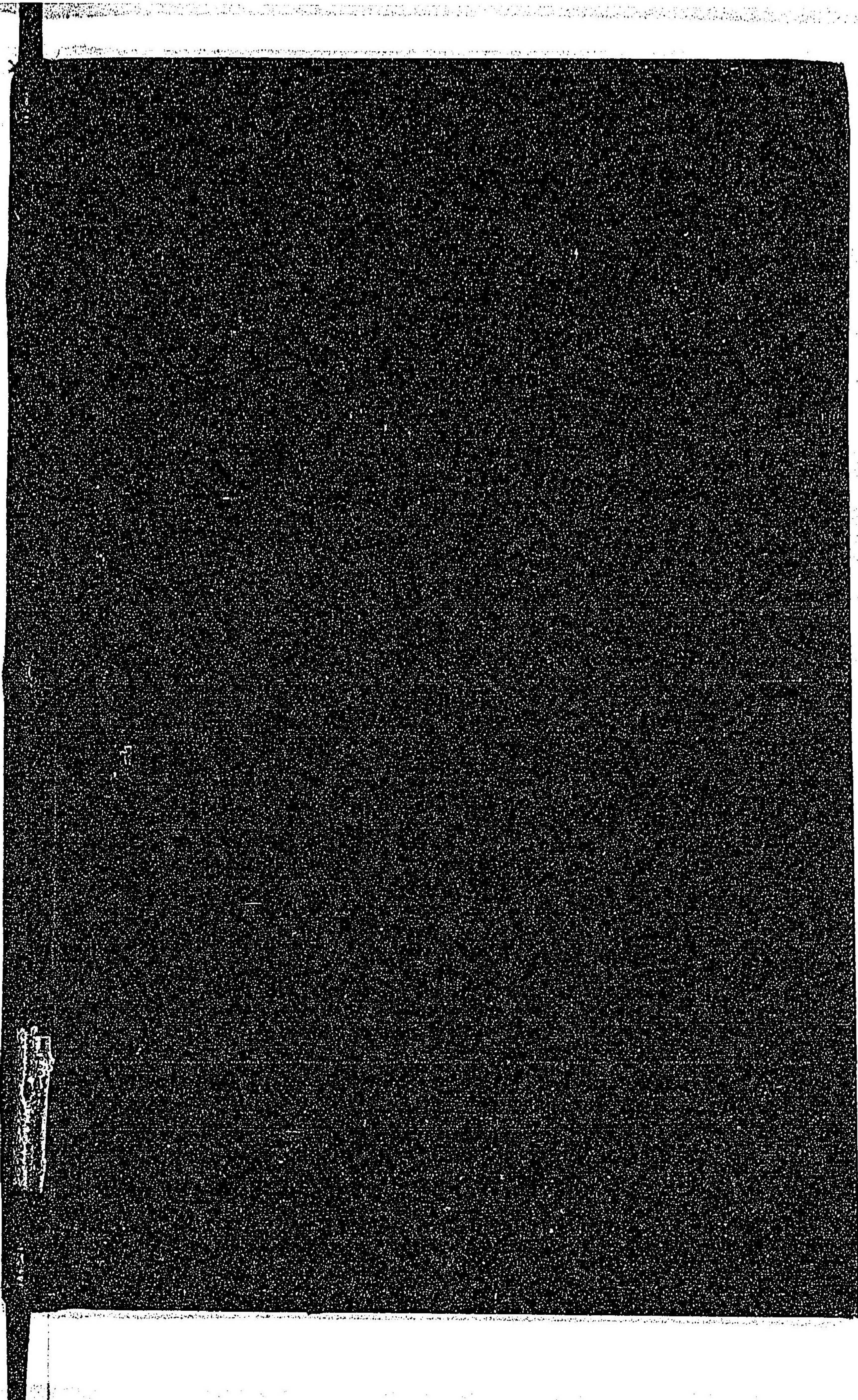
第 三 次

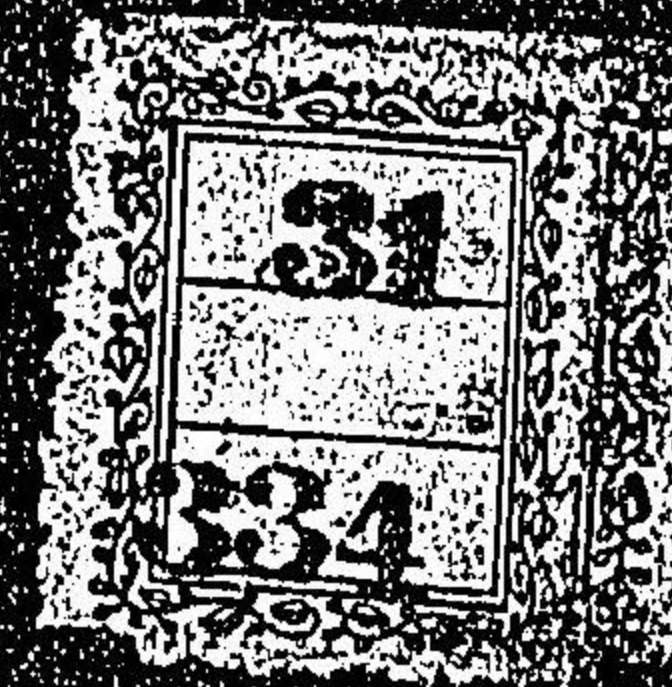
第 四 次

第 五 次

第 六 次

31
334





065017-000-4

31-334

馬匹感

佐々木 一雄/著

M40.5

CCD-0490



